

---

# 人間交錯

永久 歩

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

人間交錯

### 【Nコード】

N5104A

### 【作者名】

永久 歩

### 【あらすじ】

この日、みんなある『決意』をしていた。それぞれの決意は絡み合い、とんでもない方向へ。

## 第1話 始動

久瀬信一は、決意していた。

頬に、一滴の汗が流れるのを感じる。つまり、緊張しているということなんだろう。そんなのは当たり前だ。これから自分がやろうとしていることは、『銀行強盗』なのだから。

信一の妹が死んだのは、一ヶ月前だった。

妹の美春は、殺されたのだ。あの殺人鬼に。

犯人はまさに殺人鬼だった。何人も女性を殺害した。犯行の手段はすべて同じで、誰もいない所に無理矢理連れ込み、体の急所をわざと避け出刃包丁で突き刺す。しかし、急所じゃないため、その一撃では死なない。その後も、心臓などの部位は避け、致命傷にならないところを刺しまくり、最後に心臓に包丁を突き刺して殺す。犯人はわざと女性たちを痛ぶって、絶望や恐怖を感じさせてから殺すのだ。

まさに殺人鬼。異常。狂っている。

美春は信一にとって、自慢の妹だった。

兄が不甲斐ないせいもあってか、美春は真面目で、誰にも優しいまさに『天使』のような存在だった。信一と美春は二人暮らしでアパートに住んでいたのだが、情けないことに、家賃・食費などのほとんどを払っていたのは美春だった。

信一は24歳でフリーター。美春は、22歳という若さでもう大手企業の職に就いていた。

それでも、美春は信一を信頼していたし、信一も美春を信頼していた。ある意味では、兄妹以上の関係だったと言えるかもしれない。お互い、愛していたのだ。

その美春が死んだ、と医者に告げられた時、まず考えたのが復讐

だった。

あの殺人鬼を必ず見つけ出して殺す。

信一の頭にはもうそれしかなくなっていた。

しかし、それも叶わぬことになった。

殺人鬼は自殺したのだ。

この世はなんて残酷なのか。

大切な妹を失い、さらに『復讐』をすることも出来なくなった。

もう、自分が生きている意味はない。生きようとも思わない。

そして、金がなくなつた。

ただでさえ家の収入の大半は美春だった上に、まったく仕事をす  
る気もなくなりアルバイトもしていなかったら当然だ。

もう死んでもいい。

信一はそう考えていた。

しかし、ただこのまま死ぬのも面白くない。

そうだ。賭けをしよう。

成功したら、生きる。失敗したら、死ぬ。

それには何がいいか。そう考えながらふと足元を見ると、一枚の  
チラシが落ちていた。

合併して最近新しく出来たという銀行のお知らせのチラシだった。

( これだ )

信一は賭けを特に理由もなく『銀行強盗』に決めた。

ある意味、ピッタリかもしれない。

成功すれば、大金を持ってどこかで静かに暮らそう。失敗したら

自殺でもすればいい。

( どうせ一度は終わった人生だ。何だっしてやるさ )

信一は久しぶりに胸が弾んでいた。

これが生きているということか。

そして、数日後。信一は、新しく出来たばかりの銀行会社『葉桜

銀行』の前に来ていた。

今思えば、なんでこんなことをしようと思ったのか、いささか疑問が残る。他にも何か良い方法があったんじゃないか。潔く死んでしまった方が良かったんじゃないか。

しかし、ここまで来てやめるのもどうだろう。

(ええいつ！ 俺も男だっ！)

一度は決意したのだ。いまさら止めるなんてかっこ悪すぎる。それが人として正しいことであつたとしても。

一度大きく深呼吸をする。

少し心が落ち着く……気がする。

(よし、行くぞ！)

信一は自動ドアの前へ立った。

## 第2話 想い

折原志保は、決意していた。

問題は、いつ、それを、どこで渡すか。

今日は、志保にとって『大切な人』、桜井志郎の誕生日だった。

警察官の志郎は、今日は休日だと言っていたが、不幸なことに志保には仕事が入っていた。しかも本来ならば休みだったのに、先輩が急に体調を崩したせいで入った仕事だから夕チが悪い。

志保はため息をついた。

志郎に誕生日プレゼントを渡して、そのままこの曖昧な関係から脱け出そうと思っていたのだが。

そう。つまりは告白だ。

本当なら男の志郎から告白してもらいたいのが、恋には奥手なタイプらしく、何度も食事に行ったりしているのに何も無い。自分の魅力がないんじゃないかと思ってしまうほどだ。

とはいえ、志保も奥手なだけ。

でも、今日は違う。今日で変わる。

今日でこの曖昧な関係を脱け出して、ハッキリとした『恋人』という関係になるのだ。

そのためのプレゼントはマフラー。

不器用なので手編みではないが、こういうのは気持ちが必要なのだ。

今は四角く細長い箱にしまっている。

腕時計を見る。数字は、『11:48』と表示されている。

あと5時間は働かなきゃいけない。少なくともあと5時間は志郎に会えないと思うと憂鬱だった。

志保は最近合併して出来た銀行、『葉桜銀行』で働いている。

今日は月末ということもあり、いつもよりも客が多い。

わずかばかりのソファを確保した客の周りに、圧倒的多数の人が仏頂面でカウンターの向こうにずらりと立ち並んでいる。

ああ、憂鬱だ。笑っちゃうくらい憂鬱だ。

それでも接客は笑顔でなければいけない。笑顔こそが一番被害を小さくする技だ。

うだうだ考えていても仕方がない。とりあえず仕事仕事。

志保は手際よく窓口業務をこなす。電卓で計算をし、書類に判を押し、分けされたトレイに載せていく。客と接するときには笑顔を絶やさない。今ではどんなに気分が乗らないときでもすぐに作り笑顔が出来るようになった。

自動ドアが開く。

また客か、と思って入り口を見ると、青年がなにやらやけに深刻そうな表情をして立っていた。お腹でも痛いのだろうか。心なしか顔が少し青い気がする。

あの年で借金でも作っているのだろうか。嘆かわしいことだ。

なんだかやけにその青年が気になった。店に入ったつきりずつとうろろしている。落ち着きがない。ポケットにずっと手を入れてる。何かを触っているような感じだ。

その青年を観察していたら、ふいに、肩に手を置かれた。

「きやつ」

小さいながらも思わず声を上げてしまう。

「な、なによ。ビックリするわね」

振り向くと、そこには志保の同僚の奈緒子の姿があった。

「え？ な、なに？ どうしたの？」

「どうしたのって、交代の時間よ。ホラ、さっさとどっかで昼食とってきなさい」

時刻は12時を回っていた。青年に興味を持っていたためだろう。時間を気にするのを忘れてしまっていた。

「あ、そっか。うん。じゃ、行ってくるね」

「ハイハイ、行ってらっしゃい」

奈緒子はめんどくさそうに手を挙げる。そして、すぐに仕事に取り掛かっていた。

志保は控え室に向かう途中、ある閃きが頭に浮かんだ。

この昼休みに志郎と会おう。

志郎は休みはいつもいきつけの店で昼食をとる。ならそこに行つてプレゼントを渡して告白すればいい。これなら仕事終わりまで待たなくて済む。こういうことは早めにやっておいた方がいい。たぶん。その方が午後仕事に集中できる。

そう考えた志保は、マフラーが入った箱を持って、外へ出かけた。気分は弾み、自然と足も軽く感じる。

外へ出てすぐ、志保はさっきの青年を見かけた。ずいぶん早く用事が済んだものだ。そもそも、この青年はなんの用事で来ていたのだろう。

青年もこちらに気づいたのか、ずっとこちらを観察している。その目はまるで獲物を狙うような目だった。

(なに……？ この人……)

志保は少し気味が悪くなり、早足でここから立ち去ろうとした。

その瞬間だった。志保の腕に僅かながら衝撃が走る。

気づいたときにはもう遅い。青年は志保の志郎にあげるためのマフラーが入った箱を奪い、走って逃げていった。

何が起きたかわからなかった。

(な、なに!?)

盗まれた。奪われた。

それがわかった瞬間、焦りと怒り。そして、いまだに何が起きたのかよくわからないという困惑の感情が一気に体を支配した。

(ふ……ふざけんじゃないわよっ!)

志保は自分でも気がつかないうちに、その青年を追いかけていた。

人間交錯

### 第3話 緊張

桜井志郎は、決意していた。

告白だ。プロポーズだ。今日こそ告白するのだ。

志郎は署内では名の知れた優秀な部類に入る刑事だ。

つい最近まではワイドショーやニュース番組で騒がれた、とある連続殺人事件の捜査をしていたのだが、その事件は犯人の自殺という意外な結末で幕を閉じた。もちろん、これに対する警察への批判は少なくはなかったが、もう犯人がいなくなつたという安心感もあつてか批判はすぐに収まり、徐々に聴かなくなつていった。

一応はその事件の捜査体勢も解かれ、志郎にとって今日は久々の休み 休日だった。

だが、志郎の心は穏やかではない。犯人を逮捕するときよりも、下手したら緊張しているかもしれない。その理由は、告白をしようと決めたから。

志郎が折原志保と初めて会つたのは、別になんのドラマも奇跡もない日常の中だった。志保とは高校時代のクラスメイトだった。しかし、話しかけたことも、話しかけられたことも一度もなかったし、特別気にかけていたわけでもない。高校を卒業してからは、もう会うこともなくなり、それから8年は経とうとしていた。

そんな時だった。志郎が志保と再び出会つたのは。

とある事件で志郎は志保と再会した。その事件の『被害者』として。

学生時代はまったく話したことのないふたりだったが、ビックリするほど気があった。お互いに惹かれ合つていった。それが当然であるかのよう。

志郎にとつても、おそらく志保にとつても思い出したくもない事件ではある。しかし、その事件が在つたからこそ、今、志保とこういう関係が出来ていると思うと、志郎は一種の皮肉を感じてならな

かった。

『ごういう関係』といつても、たいした関係ではない。よくいう『友達以上恋人未満』という関係だろう。つまり、それは結局『友達』ということに過ぎないのだけだ。

だが、今日は違う。今日で変わる。それは『恋人』という関係に。志保は今日は仕事が入っているが、自分はオフだ。

そこで志郎は志保に会いに行くことにした。直接会って、自分の想いを伝えるのだ。昼休みになら行っても大丈夫だろう。さすがに勤務中は無理だろうから。本当なら一刻も早くこの想いを伝えて、志保と『特別な関係』になりたいのだが。

まだ昼休みまでは時間がある。志郎は周りを見回す。ここは街の中央。平日とはいえ辺りは人で賑わっている。四方八方から喧騒が聞こえる。所狭しと並んでいる薄汚れた高いビルや人の群れ。そんな中、志郎は花屋を見かけた。

(そうだ。花でも買っていこう)

花が嫌いな女はいない。本当かどうかはわからないが、たぶんそうだ。花と言ったらひまわり、たんぽぽ、チューリップくらいしか知らないが、なんとなくかなるだろう。志郎はその花屋『フラワーセブン』へ駆け足で向かった。

店員のお姉さんに適当に花を選んでもらった。どれも名前がわからない花ばかりだった。

準備はOK。時間もちょうど志保の仕事先が昼休みになるうとしている頃合いだった。

告白だ。プロポーズだ。今日こそ告白するのだ。

ここでやめていつ告白するというのが。

一度大きく深呼吸をする。

少し心が落ち着く……気がする。

(よし、行くぞ！)

志郎は『葉桜銀行』へと向かった。

『葉桜銀行』の店内は嫌になるくらいの人で溢れていた。

(うおっ……)

嫌々ムードが充満している。お金つて恐い。

自分はお金とかに用はなくなただ志保に会いたただけなのだが、その志保の姿はどこにもない。控え室にでもいるのだろうか。さすがに無断で行くのはマズイだろうし、もしかしたらどこかへ外出しているかもしれない。とりあえず従業員の人に話を聞いてみるべきだろう。志保がいるかいなか。いなかったらどこへ行ったのか、解れば教えてもらおう。

そうと決まれば早速と、志郎が『小清水 奈緒子』と書かれた胸プレートを付けている窓口の人に尋ねようとした、その瞬間だった。「お前らっ！！手を挙げろっ！！」

突然の、罵倒ともとれる威嚇しているような叫び声。その擦れた声の叫び声が銀行内に響き渡る。さつきまでの喧騒が嘘のように銀行内は水を打った魚のように静まり返った。

(な……なんだあっ!?)

声のした方へ顔を向けると、銃を構えたチンピラ風の若い男が立っていた。頬には大きな傷跡。体格はそんなに良いほうではない。どちらかという痩せ型だ。背は普通。170前後というところか。目は血走り、顔は赤く必死な形相を浮かべている。

その男の近くにいた人たちは、その男から少しでも離れようと後ずさるが、

「おいつ！ 動くんじゃねえっ！！」

その命令口調にピタリと立ち止まる。

「テメエ。テメエだよ！ これにさっさと金を詰める！ それとな、

警察に連絡したらここにいるやつら皆殺しだぞ！！」

まったく。言ってることが目茶苦茶だ。馬鹿だな。

『テメエ』呼ばわりされた男の店員は、渡されたカバンに言われた通りに震えた指でビクビクと振るえながらお金を詰めている。

銀行強盗か。やれやれ、面倒くさいことになった。

志郎はひとつ、ため息をついた。

## 第4話 説得

黒崎健二は、決意していた。

暁瑞穂と結婚する、と。

健二はつい最近まで『暁組』<sup>あかじきぐみ</sup>のNO.2だった。

『暁組』。一言で言ってしまうえば、『ヤクザ』だ。それもただの『ヤクザ』ではない。こちら一帯を仕切っている、警察さえもなかなか手を出せない組織だ。『暁組』を敵に回したら生きて帰ることはないとまで言われている。実際、そうだろう。それはそこで活動していた健二が一番よく知っていた。

その健二も最近、長年お世話になってきていたこの世界から足を洗った。次期組長とまで言われ、部下からも慕われていた健二が組を辞めた理由はただひとつ。

組長、暁源五郎のたったひとりの愛娘、暁瑞穂と結婚するためだ。健二は今日、結婚を許してもらうために暁組本部『暁邸』に来ていた。

「久々にお前が来たと思ったら……ふん、そんな話か」

健二の目の前にいるこの紋付袴を着ている人物こそ、誰もが逆らうことのできない男、そして暁組組長、暁源五郎だ。すでに年は50代半ばだが、その風格、威圧感は衰えることを知らない。むしろ年をとったことによりますます厳格になり、迫力が増したように思われる。

「お願いしますっ！ 瑞穂さんと……結婚させてくださいっ！！」

健二は土下座をする。

「ふむ……。瑞穂、お前はどっと思ってるんだ？」

源五郎は隣に正座で慎ましく座っている瑞穂に訊く。

「私は、健二さんを心から愛しています。健二さんのためならば、この身さえ喜んで捧げましょう」

冷淡に、それでも芯の通った語り。

「なるほど。ふたりとも気持ちは一緒か。それは素晴らしいことだな」

「……っ！で、では……！」

「だが、認めることはできない」

重く、心の内底にまで響くような拒絶の答え。

「お、お父様っ！」

「お前は黙っておれ。……健二、どうして組を辞めた」

「それは……瑞穂さんと結婚するためです」

「わからないな。別に辞める必要はないように思えるが」

源五郎のことだ。本当は健二が組を抜けた理由をわかっているだろう。この男はなんでもお見通しなのだ。

「夫が組の者じゃ、その妻は普通の生活を送ることができません。

いつ、どんな危険な目に遭うかも解らない。俺は瑞穂さんに、普通に安心して暮らせる　普通の生活をして欲しいんです」

源五郎の目が心なしか穏やかになったように見える。

「お前は本当に……瑞穂を愛しているんだな」

健二は黙って、力強く頷く。

「……健二、ワシはお前を気に入っている。高く評価している。今時お前のように、ただ真っ直ぐで、それでいて熱く、とてもしっかりとした芯を持っているような男はそうはいない。お前は千人……いや、万人にひとりいるかどうかの男だ」

褒められている……のか？　なんだか嫌な予感がする。

「……だからこそ、残念だ」

はつきりとした拒絶。その言葉が頭中を駆け回る。

健二はまだ土下座をしたままだった。諦めたくなかったのだ。しかし、ハッキリとわかった。これは、無理だ。

「おい、入れ」

源五郎は、入り口のふすまに向かって声をかける。健二もそのふすまの方へと顔を上げる。

ふすまが開かれる。入ってきた男は

「間宮……」

健二の元部下の間宮だった。暁組一番の頭脳派で、不祥事の後始末や、大きな仕事の作戦を考えていた男だ。もちろん、組から一目置かれる存在。だが、健二はこの男が嫌いだった。決して本心を語らなく、何を考えているのかわからない薄気味悪いところや、こっちの心の奥底までも観察していそうな蛇のような目。冷静に、淡々と感情を表さずに仕事をこなす冷徹さ。すべてが嫌いだった。

「ご無沙汰しています、黒崎さん……」

馬鹿丁寧に頭を下げてくる。心なんかまったく籠っていない。見ていて反吐が出そうになる。

「健二、今のこの組のNo.2はこいつだ」

「はあ……」

確かに、間宮ならそんな地位に立つてもおかしくはないかもしれない。頭は切れるし実力もある。それは認める。しかし、そんなことを今、自分に紹介してどうなるのか。……まさか。

「瑞穂は、間宮と結婚してもらおう」

室内が静まり返る。

……やはり、そういうことか。

「ま、待ってくださいお父様っ！ 私はそんなの認めないって言ったじゃありませんかっ！」

その沈黙を破ったのは瑞穂だった。

「お前が認める認めないの問題ではない。これは他の組との関係なども考慮した上での判断だ。説明すると、ややこしいがな。健二、お前にはわかるだろう」

確かに、理解はできる。他の組との関係。たしかに組長のひとり娘といえどそれなりの地位を持っているのだ。そこら辺の関係は複雑ではあるが、組のためならば、その組の幹部のような男と婚約させるのがベストの判断だといえる。

理解はできる。だが、理解したくない。それでは瑞穂の気持ちは幸せはどうなるのか。

健二はただ黙っていた。

「私の気持ちは……無視、ということですか」

「生意気な口を聞くな」

「……お父様はいつもそうです。組のため組のため。私なんかどうでもいいんですか!？ お父様にとって、私はただの操り人形に過ぎないのですか?!？」

「お嬢様、落ち着いてください」

間宮が冷静に諭す。

「……あなたに『お嬢様』なんて呼ばれたくもありません」

「……やれやれ。私も嫌われたものだ」

首を横に振っている。しかし、顔は笑みを浮かべている。

……相変わらず気持ち悪い男だ。

「しかし、黒崎さん。こんなところでくだらないことしていいんですか」

「くだらねえだと？ テメエ……。何様のつもりだ」

くだらないよばわりされる覚えはない。

「くだらないことですよ。あなたがいくらなにをしようと、もう私とお嬢様の婚約は決まっていますのですから」

「……おいおい。ずいぶんと偉くなつたもんだな。ええ?」

拳に力が入る。ぶん殴りたい。

「それに、あなたの元部下が街で暴れているそうですよ」

「……なに?」

「間宮。どういふことだ」

源五郎の訊ねに、ひとつ咳払いをして間宮は答える。

「実は……ウチの組の銃がひとつ盗まれていましたね」

「なんだと!？」

「なんでさつさと言わなかった!！」

「すいません。さつきチェックして気づいたもので。しかし犯人の目星はついておりません。大槻銀也」

「ギンがつ!？」

大槻銀也。通称『ギン』。健二の部下、というよりは弟分といったところだ。一番かわいがっていた部下だった。

「ええ。つい先ほど入ったニュースですが、『葉桜銀行』で銀行強盗が起きたようですよ。犯人と思われる男は頬に目立つ傷跡があるとか」

目立つ傷跡。まさにギンのトレードマークだった。間違いない。

「テメエッ！ 何してやがる！ それが解ったんならさっさと行ってこいよ！」

「冗談言わないくださいよ黒崎さん。あの小僧は私の命令なんて聞きません。聞きませんよ、あなたの命令しかね」

「 どういうつもりだ？」

「いえ。別に。ただ早く行ってやらないと、あなたのかわいい元部下が捕まってしまうかもしれないよ？ そしてウチの組の銃だと警察にわかったら、結構厄介なことになるかもしれないんねえ」

「はっ……。最低野郎が」

何のつもりだコイツは。俺に行かせて何の得がある？ ……考えていても仕方がないか。

健二は源五郎の方へ顔を向ける。

「組長。ちよつと行ってきますわ」

「……大丈夫なのか？」

「これでも元No.2ですから。あの馬鹿連れて戻ってきますよ。絶対に。戻って、もう一度、いや、何度でもあなたに結婚を許していただけるまでは何度も説得してみせますよ。覚悟しといてくださいね。俺は、諦めませんから」

「……好きにしろ」

組長は微笑を浮かべている。

健二は今度は瑞穂の方へ顔を向けて

「行ってきます。絶対、戻って来るから」

「……はいっ」

瑞穂は微笑む。可愛かった。これだけで元気が出る。  
憎たらしい間宮の顔は見ない。  
そして、健二は『葉桜銀行』へと向かった。

## 第5話 岐路

久瀬信一は走っていた。

やっぱりダメだった。無理だった。失敗だ。出来るわけなかったんだ、『銀行強盗』なんて。自分には到底不可能なことだったのだ。後ろを振り返る。追いかけてきた女の姿は見えない。少し安心する。

ペースを徐々に落とす。息はすでに荒い。立ち止まり膝に手をつき呼吸を整える。鼓動が激しい。全力疾走したのなんて学生時代以来だ。さすがに疲れる。

街行く人々も、少しは信一のことを気にかけるが、すぐに視線を逸らす。若くてよかった。これが若くない中年のハゲオヤジだったりしたらもつと怪しまれていただろう。若気の至り、ただの馬鹿程度にしか思われない。

顔を上げると喫茶店の看板が目に入る。

あの女も来ないし、少し休むのもいいかもしれない。それにもしかしたら意外に盲点となつていい隠れ場所になるかもしれない。よし、そうしよう。

信一は喫茶店『星後』に入った。

店内は落ち着いた雰囲気のお店だった。やたらと広い空間。机や椅子は木で出来ており、樹木のいい香りがする。外からは見えない席を探して座った。

信一は頼んだコーヒーをひとくち口に含む。……苦い。

(これからどうすればいいんだ……)

カップをテーブルに置き、考える。まずはさっきの自分の行動を思い返すことにした。

『葉桜銀行』に入った信一は、まず予想以上の人の多さに驚いた。一気にやる気が削がれる。もしこの人たちが一斉に反抗したら……。そう考えると、とても『手を挙げる』なんて言えない。言えるわけがない。

手をポケットに入れる。硬いものに指先が触れる感覚。ひんやりと、冷たい。ポケットの中に入れているもの。ピストルだ。とはいえ、もちろん本物なんて用意できるわけがない。偽物。よく出来たレプリカだ。プロさえも本物と見分けがつかないといわれている代物。

脅しに使うには十分だろうと考えていたが、いざとなると不安だらけだ。もし、偽物だと見破られたら。体が震える。心臓がバクバク言っている。

それによく考えたら顔を隠していない。これじゃバレバレじゃないか。馬鹿か、オレは。そうだ。そこにいる女性にストッキングでも借りて……。だ、ダメだ。そんなただの変態じゃないか。強盗以前に違う容疑で捕まるぞ。そもそも貸してくれるわけがない。

やっぱり無理だ。もともと無理がありすぎたのだ。『銀行強盗』は諦めよう……。

信一は、銀行を出た。

(これでよかったのか……?)

日光がやけに眩しい。

結局自分は何もしていない。どこまで自分はダメなのか。このまま目標もなく朽ち果てて死ぬのがお似合いなのだろうか。

そんな考えをしていたら、裏口から女性の銀行員が出てきた。さつき窓口からやたらとこつちをジロジロと見ていた女だ。何か細長い箱を大切そうに抱えている。

(待てよ? あれは……?)

銀行員。裏口。箱。大切そうに抱えている。  
もしかして、もの凄く高価なものなのでは？  
銀行の大切な貴重品？ あるいは、宝石？ 大金？ ビッグマネー？

……作戦変更。あれを奪う。

女は何か察したのか小走りに走り出したが、時すでに遅し。信一はマッハとも言えるスピードで動いていた。

女の腕からその箱を奪う。そして、走って逃げた。

女は、何が起きたのかわからないのか、少しの間固まっていたが、すぐに凄い勢いで信一を追いかけてきた。

信一は走りながら思った。

(や……やってしまったあっ！)  
あとはただ逃げるのみだった。

そして、今に至る。

喫茶店『星後』の店内。信一はふと気づいた。

そういえば箱の中身を確認していなかった。あそこまでの勢いで追いかけてきた、ということは、やはり貴重な物なのだろう。宝石か？ 大金？ ビッグマネー？

中身を確かめようと、箱に手をかけようとした。

そのときだった。頭上に設置されているテレビから、突然やかましい声が聞こえてきた。

『臨時ニュースです。さきほど、葉桜銀行にて銀行強盗が起きた模様です！』

な、なんだって？

ぎ、銀行強盗だと！？ オレのことか！？ いや、銀行強盗はやっていないぞ！？

『こちら、現場の浜尾です！ ただいま葉桜銀行前に来ています！

野次馬で大変な人の群れです！ 犯人はいまだ中にあること  
で、周りは警察が包囲しています！ しかし、なかなか中には踏み  
込めない模様で……」

なんなんだ。どうなっているんだ。

信一は頭が混乱してきた。

（オレの他にも『銀行強盗』を企んでいたヤツがいたってことなの  
か？）

自分は無関係。そう思ったが、ずっと頭は混乱している。

（どうすればいい！？ ここから動いたほうがいいのか！？ この  
ままの方がいいのか！？ い、いやいやでもオレは無関係だよな。  
警察に追われるようなことは……し、してるうっ！！）

信一の混乱は止まらない。

やはり一刻も早くこんな所よりも遠いところへ逃げるべきだ。

そう思った信一は店を出た。

しかし、店を出た途端にさっきまで信一を追いかけてきていた女  
を見かけた。

（うおおっ！！）

しかし、その女はなにやら如何わしい変な男と口論をしているよ  
うだった。街の中で大声を出して恥ずかしくないのだろうか。

その口論の真っ最中で、女はまったく相手にしている男以外には  
注意を払っていない。目を向けていない。チャンスだった。女は信  
一に気づいていない。逃げるなら、今。

そう思って逃げようとした信一の目に飛び込んできたものは、そ  
の女の顔を殴る男の姿だった。

（っ！？）

動きが止まる。もう逃げることなんて意識はどこかへ飛んでいた。  
残ったのは、混乱。

何が起きているんだ！？

女を殴った男は、女を無理矢理に引つ張りどこかへ連れて行くこ  
うとしていた。女は必死に抵抗している。その様子を見ているものも

いたが、みんな見ているだけで、止めない。

何してんだ。止めるよ。

そう思った信一だったが、自分も、一緒だった。体が動こうとしなかった。助けたい。しかし。

まるで心のなかで渦が巻いているかのような感覚。

あつという間に男は女を無理矢理に車に乗せ、走り去っていった。そのとき、信一の中で何かが変わった。

助けたい。

自分でも自分のことがよくわからなかった。しかし、気づいたときには信一はその車を追いかけていた。

だが、相手は車だ。追いつけるはずがない。

(くそっ！)

そのとき、バイクが路上駐車して置いてあった。鍵は付いていて、エンジンはかかったままだ。

これだ。

もはや偶然とは思えなかった。自分はその女を助ける使命がある。そう思うほどだった。

信一はバイクに飛び乗る。免許は持っている。学生時代に取ったものが、今、役に立つとは。

信一は苦笑し、バイクで走り出した。

あの男と女が乗っている赤い車を追いかけて

。

## 第6話 凶悪

折原志保は追いかけていた。

なんで自分がこんなことをしなければならぬのか。

それもすべてあの青年のせいだった。

あのマフラーは桜井志郎へのプレゼントなのだ。普通のマフラーだったら諦めていたかもしれない。しかし、あのマフラーは一ヶ月も前から頼んで作ってもらった特注品。世界にひとつしかない志郎のためのマフラーなのだ。

志保はそのマフラーが入った箱を盗んだ青年を追いかけていた。中学、高校と陸上部に所属していたこともあり、スタミナにはそれなりに自信がある。もちろん、昔ほどの体力はなくなっていたが。それでも、同年代の同姓と比べたら、極めて体力は高いほうだと思う。

自信はある。とはいえ、おそらく相手は自分よりも少なくとも3、4歳は若い青年だ。さすがに引き離され、見失ってしまった。

(か、勘弁してよ……)

腕時計を見る。もう取り返しても、昼休みの間に志郎に会っている余裕はない。

そこで、立ちすくむ。

もう諦めてしまおうか。

そんな考えが頭をよぎる。

いや、しかし。

ふと、空を見上げる。どこまでも、どこまでも高い。青い景色の中で、一羽の鳥が空を翻っていた。もしも自分に翼があれば楽なのに。そんなファンタジーなことまで考えてしまった。

視線を下ろす途中、喫茶店の看板が目に入った。喫茶店『星後』。あの青年、もしかしたらここで休憩してたりして。

……そんなわけないか。普通ならこんなところには目もくれず、ず

っと遠くへ逃げてるハズだ。

(どうしよう……)

昼休みも終わってしまふ。

『臨時ニュースです。さきほど、葉桜銀行にて銀行強盗が起きた模様です!』

……え?

声は、路上からも見えるように建物に設置されている大型スクリーンから流れた。

ぎ、銀行強盗!? 葉桜銀行で!?

『こちら、現場の浜尾です! ただいま葉桜銀行前に来ています! 野次馬で大変な人の群れです! 犯人はいまだ中にいるとのこと、周りは警察が包囲しています! しかし、なかなか中には踏み込めない模様で……』

いったいなにがどうなっているのか。志保は少し目眩を覚えた。

葉桜銀行に戻ったほうがいいかもしれない。

志保が踵を返そうとした、そのとき。

「よお。志保じゃねえか」

背後から呼びかけられる。

聞き覚えのある声。

聞いただけで背筋が凍りつくような声。

体が震える。この声。この気配。

志保は恐る恐る後ろを振り返った。そして、あの男が、いた。

「偶然だなあ、おい」

昔と変わらぬ姿。赤い髪、耳にはピアス、狂気な目、高い鼻、薄い赤みの唇。

見ただけで、気分が悪くなる。

志保にとつて一番忘れたくて、忘れることができない相手。

志保と志郎が出会うきっかけとなった事件の首謀者。  
かみしろ しんご  
神代伸吾。

「どうして……あなた、まだ刑務所の中なんじゃ……」

「はっ。あんなむさ苦しい場所にいられるかよ」  
笑みを浮かべながら話す。

「まあ、こうして会ったのもなにかの縁だ。今ちよっと困っててな。  
金貸してくんねえか」

「ふざけないで。もう私はあなたと関係ないわ」

「おいおいつれないな。昔は愛し合った仲じゃねえか」

「……二度と私の前に現れないで。あなたを見るだけで気分が悪くなる」

「だから金くれりゃさっさと退散するって。お前その制服、あの銀行の制服だろ。店から金取ってきてくれよ」

「何言ってるのあなた。馬鹿じゃないの。そんなこと出来るわけないでしょ」

もう早くこの男から解放されたい。逃げたい。けれど、恐怖で足が動かない。

「じゃあ、お前んとこ泊まらせてくれよ。今厄介なことになってるからよ」

「ふざけないでよ！ もう私に関わらないで！！ お願いだから！！」

街の真ん中だと言うのに、思いっきり叫んでしまう。何人か何があつたのかとこっちを見ている。

神代はひとつため息をつく。笑みがなくなる。

そして突然、神代は志保の髪を思いっきり引っ張った。

「痛っ……！！」

志保に顔を近づける。

「うるせえんだよ……。ゴチャゴチャ言ってるねえで、俺の言う通りにすりゃいいんだよ」

まだ髪は引っ張られている。激痛だ。

「ぜ……絶対に、嫌……」

神代の目つきが変わる。

その瞬間、左頬に衝撃が走る。顔が半回転する。

殴られた。拳で。痛い。口の中で血の味がする。目には自然と涙が溢れる。言葉は出ない。もう心は空虚だ。何も考えられない。「じゃあ、死ね」

神代は志保の腕をとり、どこかへ連れて行こうとする。志保もとっさに抵抗するが、力で適うわけがない。それでも抵抗していたら、胸ぐらを掴まれた。その衝撃で胸に付いていた名札が落ちる。

「さつさと来やがれ!!!」

怒声。みんな見ているだけで、誰も志保を助けようとはしない。怒りはしない。所詮、そんなものだ。

赤い車の後部座席に押し込まれる。神代は運転席へ座り、エンジンのかけた。

頭はずうつとぼんやりしている。

(これから私、殺されちゃうのかな)

この男なら、やっても不思議ではない。

しかし、もう、何も考えられない。どうだっていい。とにかく、早くこの男から、苦しみから解放されたい。

志保は目を閉じる。

真っ暗だった。

何も考えなくなかった。

しかし、その暗闇のなかで、志保はある光を見つけた。

( 誰? )

その光に包まれた人物は、こちらを向き、やさしい微笑みを見せた。

この人は。

( 志郎くん )

自然と、志保の心の中は志郎のことが思い出されていた。

涙が、溢れた。

痛みや虚無感から出る涙とは違う涙が流れた。

志保にとって、ただひとつの希望。

桜井志郎。

人間交錯

（志郎くん、助けて  
車は、走り出した  
。）

## 第7話 標的

桜井志郎はうんざりしていた。

目の前で起きている、この状況に。

「おらっ！ さっさと金、詰めやがれ！」

銀行強盗。周りの人たちはみんな縮こまっている。誰も口を開かない。

さて、どうしたものか。

志郎がそんなことを思っていたその時だった。外からサイレンの音が鳴り響く。

これは 警察？

その異変に、男も気づく。

「なんだ！？ サツのヤツら、もう来やがったのかっ！？ 早すぎるぞ！」

銀行強盗犯は額に汗を浮かべ、うろたえている。

確かに早い。早すぎる。異常だ。まだこの男が来て事件を起こしてから5分も経っていないのではないだろうか。

考えられる可能性は、ひとつだった。

誰かが あらかじめここで銀行強盗が起きるということを知っていた誰かがタレコミをしたという可能性。

では、いったい誰が？

外を見ると、TVカメラや記者たちの興奮している姿も見える。

「誰だっ！ 誰がサツに連絡しやがった！！ 女！ お前か！！」

男がピストルを女性銀行員に向ける。向けられた女性は確か、窓口にいた『小清水 奈緒子』とかいう名前の女性だった気がする。

ピストルを向けられたその女性は青ざめた顔で黙って首を横に振る。

男はもう尋常じゃない目をしていて。追いつめられた男の目。危険だ。

外にいる警察官たちも、中に大勢の人たちがいるせいか、なかなか踏み込んでこない。

「クソッ……！ 逃げるためには人質が必要だな……。おい！ 女！ こっち来い！」

しかし、女性銀行員は動かない。というよりも、足がすくんで上手く動けないようだった。

（俺の目の前で、被害者を出すわけにはいかないよな）

目の前で、人が傷つけられる光景は見たくはない。……絶対に。

志郎の正義感に火がつく。志郎は足を進めた。

「おい！ そこっ！ 動くんじゃねえっ！！」

男は今度は志郎にピストルを向ける。

「なんだよ。わざわざ人が親切にもアンタの人質になってやろうとしてるつてのに」

「……なんだと？」

「それともなにか？ 自分よりもか弱そうな女性じゃないと、人質にする勇気もないか」

困惑気味の顔をしていた男の顔が見る見る内に赤くなっていく。

「てめえ……。言ってくれるじゃねえか。ふざけたカッコしやがって……」

今、起きているのは銀行強盗。そして、今、自分は花束を抱えて立っている。確かにこの状況にはそぐわない格好だった。だが、好き好んでこんな状況にいるわけではないのだが。

「いいさ。命知らずのお前でいい。よし、こっち来い」

「はいはい」

志郎は銀行強盗犯の男の元へと歩きだす。

外は呆れるくらいやかましいが、中は至って静かだった。

足音が響く。みんなが緊張や不安の趣で志郎を一挙一足の動作を見ている。

途中、さっきの女性銀行員がこっちを心配気に見つめていた。志郎はその人に軽く微笑むと、花束を手渡した。

「ちょっと預かってもらっていいですか？」

「え？ あ、あの？」

花束を渡された女性銀行員には何が起きているのかわからないようにでポカンとした顔をしている。

「何やってやがる！ さつさと来い！」

志郎は歩き出す。犯人との距離は、徐々に狭まっていく。

男の、いやらしく笑っている顔が目に入る。

こんな男のせいで、誰かを悲しませるわけにはいかない。

一步一步。距離を詰めていく。

(あと5歩。4、3、2、1……今だっ！)

素早く犯人のふところに忍び込んだ志郎は、その男を一気に背負い投げる。そしてその男の腕を掴み、一気に床に押し倒した。

一瞬。その出来事にそこにいる人たちはまだ何が起きたのか理解していないようだった。それは銀行強盗犯の男も同じ。志郎以外の人々は皆、理解出来ていなかった。

その出来事が合図だったかのように、外に待機していた警察官たちが突入してくる。

もう終わりだ。

そう思った志郎だったが、男は片方の腕の裾から何かを取り出した。

(何っ!?)

その『何か』は、爆発した。

悲鳴。爆音。辺りは白い煙で包まれる。火薬などの類の爆弾ではない。これは 煙幕？

煙を吸い込んでしまった。咳が出る。あちこちからも咳が聞こえる。視界はすべてが白く、何も見えない。男を掴んでいる感触もない。

逃げられた。

やっと、白い煙が薄くなり、何とか辺りが見えるようになった。自分の不注意だった。詰めが甘かった。幸いにも負傷者はひとりもないようだ。危なかったかもしれない。自分のミスで人が傷つくことはたくさんだった。

「休日なのに、大変だったわね。桜井くん」

「あ……春日警部補！ お疲れ様です」

目の前には警官の制服を着た志郎の先輩で上司の女性、春日警部補が立っていた。

「お疲れなのはそつちよ。まったく、休日にこんなことに巻き込まれるなんて、キミもついてないわね」

微笑を浮かべ、そんなことを言われる。笑っている顔は、相変わらず綺麗だった。さすが署に非公式ではあるがファンクラブがあるくらいだ。スタイルもいい。

と、そんなことを考えている場合ではない。

「で、あの。さっきの男はどうになりました？」

「不覚にも逃がしちゃったけど。でも木村くんや佐藤くんが追ってくれてるわ。すぐ捕まるわよ。あなたは心配しないで、残りの休日を楽しみなさい。……前の事件、キミは大変だったんだから、ね」

「……はい」

やさしい言葉をかけられる。温かかった。

立ち去ろうとした春日が、何かを思い出したかのように、こつちを振り返る。

「あ そうそうそれとね、桜井くん。ちょっとウチの署にタレコミがあつてね」

「は？」

急に、真剣な表情に変わる。

「……神代伸吾。覚えてるわよね」

神代伸吾。昔のある事件の犯人だ。なぜ今そいつの名前が出てく

るのか。

「この近くで見かけたって情報があつたわ」  
「なんだって？」

「ば、馬鹿な！ だってアイツは今」  
捕まつて、牢屋の中にいるはずだ。この自分の手で捕まえたハズだ。

「私も調べてみたんだけど……もう、いなくなっていたわ。釈放  
いいえ、これは裏で何かあつたようね。嫌な話だけど」

目眩がする。馬鹿な。あの男が。あの悪魔が？

その瞬間、嫌な予感が脳裏を走る。不意に、志保の顔が頭に浮かぶ。なんだ。なにを考えているんだ自分は。縁起でもない。

「ホントは休日明けに言おうと思つていたんだけど、キミが担当した事件だつたし、それにキミはこの事件に他の事件とは違う感情を抱いていると思つて」

「ええ……」

思い出したくない事件。けれど、決して忘れることのない事件。

「それと、もうひとつ。まあ、これはキミとは関係ないと思つけど、『暁組』の家紋が入った銃が、とある場所で発見されたわ。キミ、そういう世界に詳しいようだから、一応、ね」

暁組。別に詳しいわけではない。ただ最近までその組に友人がいたというだけの話だ。とはいえ、一応連絡くらいはしておいた方がいいかもしれない。暁組の家紋が入った銃といつたらそこらの銃とは違う、組長専用の銃のハズだ。

「それじゃ、志郎くん。……ごめんなさいね。休めなんて言ったのに、混乱させるようなこと言っちゃって」

「いえ。情報、ありがとうございました」  
「……無理しちゃ、ダメよ」

心配そうにそう言つて春日は銀行から出て行つた。

無理しちゃダメ。色々な意味に取れる言葉だったが、なんだか今の自分にとても適した言葉のように思えた。

自分もこうしちゃいられない。  
志郎は外へ向かって、歩きだした。

元曉組の友人に電話でさっきの連絡をした志郎は、街の中を歩いていた。休むことなんて、もう考えなかった。

神代伸吾。その男の名前が出てくるとは。志郎の頭の中は神代のことですばいだった。

考え事をしながら歩いていたら、何か地面とは違う異質なものを踏んだ感触がした。足元を見ると、名札が落ちていた。

(なんだ?)

それを拾って、名前を見る。はじめから嫌な予感があった。そして、こういうときの嫌な予感というものは大抵当たるものだ。

名札に書かれている名前。それは 『折原志保』。

なんだ。何が起きている。

志保。神代。昔の事件。そして、自分。

胸が痛む。もうわけがわからない。とにかく志保が心配だった。

「あつれー、志郎さん。どうしたんすか」

車道から声をかけられる。車の窓から出てる顔は、後輩の久保だった。そういえばこの男も連続殺人事件の捜査をしていたひとりだ。志郎と同じく今日は休みなのだろう。丁度よかった。

「久保。ちょっと車貸せ」

「ええっ!?! か、勘弁してくださいよ志郎さん。僕、これから彼女と久しぶりのデートなんすよ」

「そうか、貸してくれるか。悪いな」

「あ、頭が悪いですよアンタ!!!」

「いいのか? お前が前の合コンでした行為をその彼女に話して」

「きよ、脅迫じゃないですか！ アンタ警察官でしょ」  
「彼女がいるにもかかわらず、女の子をトイレに連れ込んで」  
「ちよつ！ 何で知って い、いや、というか、ホント勘弁して  
くださいよー！」  
「じゃあ、貸せ」  
「……」

結局、久保から車を借りる。はじめから素直にそうしていれば文句はないのだが。当の久保は、「カツアゲのほうはまだ良心的ですよ！」と捨て台詞(?)を吐いて涙を浮かべて走っていつてしまった。

さて。問題は志保と神代だ。

神代がいそうな場所は見当がついていた。

1年前、志郎が神代を逮捕したあの場所。『死者の森』。

志郎は車を走らせた。

(絶対に、お前を守る。守ってみせる)

志保のことを想って。ただ、志保が無事でいてくれることを、志郎は願った。

そして、決意。神代 あのエ魔を二度と馬鹿なことが出来ないように、完膚なきまでに、叩きのめす。

## 第8話 追求

黒崎健二は後悔していた。

今、自分が置かれてこの状況に。自分が今、葉桜銀行に行つてどうなるというのか。

既に警察がいたらどうしようもない気がする。下手したら自分まで捕まってしまうのではないか。警察の世話になるのだけは御免だった。まだ瑞穂との結婚も承諾してもらえていないというのに。

とはいえ、あそこまで大口叩いて出てきてしまったのだ。ただで帰るわけにはいかない。

車を走らせながら健二は思った。ヤクザを辞めた自分がどうしてこんな目に遭わなければいけないのか。

（ くそっ！ ギンのヤロウ！ ）

こうなったら怒りをすべてギンにぶつけよう。

あのアホ。バカ。マヌケ。アホ。アホ。

そのとき、胸ポケットに入れていた携帯電話が突然鳴り出した。

少し驚きつつ見てみる。表示されている名前は 『 桜井志郎 』 。

健二と志郎は大学時代からの友人だった。健二にとって志郎は信頼できる親友と呼べるような存在であった。

しかし、健二は俗に言う『極道』の世界へ、志郎は警察官へと道を進めたため、お互いの関係上、会うことはほとんどなくなっていた。

けれど最近では健二が晝組を抜けたため、昔のように飲みに行ったりもするようになった。志郎と一緒にいる時間は、健二にとって数少ない安らげる時間となっていた。

そんな志郎から電話とは珍しい。飲みに誘ったりするのは大抵、

健二だし、それも夜と決まっている。今は昼間だ。  
なにかあったのだろうか。健二は通話ボタンを押した。

その電話は、概ね健二を気にかけての電話だった。相変わらず律儀なやつだ。

暁組の家紋が入った銃が発見されたということから、自分が銀行強盗事件に巻き込まれたという愚痴まで。

その銀行強盗について訊いたら色々と答えてくれた。志郎は、なんでそんなことを訊くのかと疑ってきたが、そこは適当にごまかす。さすがにその銀行強盗犯が暁組の一員で、自分の元部下だったなどとは言わなかった。言えるわけがなかった。

『それじゃ、伝えることは伝えたぞ』

「ああ、ありがとな」

『……また飲みに誘ってくれよ？』

「もちろんだ」

電話を終える。

どうやらギンは今、逃亡中らしい。少し安心する。さすが昔から逃げ足が速く、『逃げのギン』と言われていただけのことはある。

それにしても。

志郎のことが少し心配だった。志郎はどこかいつもと違う声をしていた。まるで何か思いつめているような。嫌な予感がした。大変な目に遭っているんじゃないだろうか。

健二が志郎を気にかけていたそのとき、窓からギンの走っている姿が見えた。

（ 見つけたっ！！ ）

そつだ。俺も大変だった。

健二は車を止め、ギンを追いかけた。

後は簡単だった。

健二はすぐにギンを路地裏に追いつめた。

「け、健二さんっ！ ど、どうして……？」

目の前に、組を辞めた自分の慕っていた人物が突然登場したことに、心底驚いているようだった。

「そりゃ、こつちの台詞だ馬鹿ヤロウ！！ なんてことしてやがる！！」

「組を辞めた健二さんには関係ないじゃないスカ！」

「それが大アリなんだよ！」

お前を連れて行かないと、まともに話も出来やしない。

「お、俺、金が欲しかったんス。だ、だって」

「わかったわかった。理由は後で聞いてやる。とりあえず組長んところ行くぞ」

『組長』というのはタブーだったようだ。見る見るうちに顔が青くなっていく。

「そ、そんな！ 見逃してくださいよ健二さん！ ホラ、これ！

昨日買ったばかりの宝くじあげますから！！」

「いるかつ！！ んなもん！！」

宝くじを叩き落す。くじは風にとばされどこかへ行ってしまった。

「ふ……ふふ……。じゃあ、仕方ないっスね……」

突然雰囲気が変わる。な、なんだ。

「健二さん……。この俺が黙って追いつめられたと思っているんスカ？」

「な、なんだと？」

「甘い！ 甘いっスよ！ コーヒーに角砂糖5つ入れるくらい甘いっスよ！！」

それは甘い。

「実は、俺。この近くにバイク止めてあるんすよ。それじゃ、健二さん。またどこかで！」

そついうな否やギンは素早く逃げ出した。

(しまった!！)

慌てて健二はギンを追いかけた。

が、すぐに見つかった。ギンは路上でへたりこんでいた。

負のオーラが出まくっている。

「ど、どうしたんだ？」

「……ない」

「は？」

「ここに停めておいたバイクが……俺の愛車が……ぬ、盗まれたっ……!！」

健二はギンの肩に手を置いた。

( ついてない男だ )

健二は少し同情した。

「それは、本当か？」

「はい。信頼できるスジからの情報です」

健二は志郎からの情報を暁組組長の源一郎に話していた。今、この『組長の部屋』には、健二、源五郎、瑞穂、間宮の4人がいる。

ちなみにギンはこの組員に別の部屋に連れて行かれされていた。今頃きつと拷問タイムだろう。警察に捕まったほうが断然マシだったはずだ。とはいえそうなら自分が困っていたが。

「ふむ……。そうか。まあ、しかしご苦労だったな。よくやった」

「話はまだあるんです、組長」

「ん？ なんだ？」

「実は、ちよつと思つところがありました」

そう。ひっかかっていたことがある。

「ほう。言ってみろ」

「先ほどの銀行強盗事件。異常に早く警察が駆けつけたそうです。まるで、銀行強盗が起こるということをあらかじめ知っていた人物が事件が起こる前に警察にタレコミをしたかのように」

室内は静かだ。源五郎は不審な顔をして聞いている。いったい何が言いたいのかわからない、といった表情だった。

「では、あらかじめ知っていた人物とは誰なのでしょう。ギンに拳銃を盗ませ、銀行強盗をするように仕向けた人物。もし、いるとしたら、この組の者に間違いはありません。なあ 間宮」

源五郎と瑞穂は驚いたようにふたり揃って間宮のほうへ顔を向ける。当の本人、間宮はいつもとかわらぬ表情。無表情だった。

「……何が、言いたいのですか？」

「テメエがギンに拳銃を盗ませ、銀行強盗をするように仄めかしたんだろ」

間宮は呆れたようにため息をつく。

「なにを馬鹿なことを。 仮に 仮にですよ。もし私がそのよくなことをしたとして、この組になんのメリットがあるというんですか。今回はアイツが捕まらなかったから良かったものの、そんなことしたらメリットどころか、デメリットだらけ。下手したらこの組も大変なことになりますよ」

「その通りだ。それがまさにお前の狙い、お前のシナリオだった」  
「……はい？」

「お前が考えたシナリオの結末は、この組を 組長を潰して、自分がトップになり、組を自分の支配下に置くこと。違うか？」

「はは。つまらない冗談ですね」

「お前の最大の誤算はギンを甘く見ていたということ。間違いなく

捕まると思ってたんだろが、残念だったな。アイツは昔から逃げ足だけは誰にも負けなかった」

間宮の表情に、徐々に曇りが出てくる。

「証拠もなしに何をほざく」

「じゃあ何で銃のことをもっと早く言わなかった」

「なに？」

「この組の規則では銃の管理は必ず夜にN02がするようになっている。そして、ギンがここからいなくなったのは一昨日の昼。何故もっと早く言わなかった」

この組のことならなんだって知っている。

「だ、だからそれは私の不注意で別に意図があったわけでは」

「だとしてもおかしい。ならなんで今日の朝には銃がなくなったということがわかったんだ？ 朝に銃を管理する規則なんてない。夜には伝えなかつたのに、朝には伝えた。つまり、あらかじめ知っていたが黙っていたということじゃないか？」

「ち、違う！」

「そして、この組の家紋が入った銃。これを盗みどこかへ放置したのもお前だろ。この特別で大切な銃の管理も、N02の仕事だから」

「いい加減にしろ！！」

この男の仮面は剥がれつつあった。あと一押し。それで、終わりだ。

「しらばっくれても無駄だぞ。あの銃にお前の指紋がベツタリ付いていたらしいからな」

「ば、馬鹿な！ 確かに指紋が残らないようにふき取った。……っ！！」

「はっ。蛇が何焦ってたんだよ、マヌケな悪党め。お前の指紋が付いてるのは当然なんだよ。管理がお前の仕事なんだから。それを『指紋が残らないようにふき取った』、ね。まったく、何を怪しいことしようとしてたんだか」

「……き、貴様！ 騙したのか！！」

「と、いうことは認めるってことか？」

間宮が言葉に詰まる。表情、感情をむき出しにしているこの男には、以前のような恐さはまったく感じられない。

源五郎は鋭く、冷たい目で間宮を見つめていた。

「ち、違つんです！ お、俺 わ、私は」

「ひとつ教えてやるよ蛇ヤロウ。まあ、これはお前も知っていることとは思うがな。『暁組を敵に回して生きて帰れるものはいない』。

……地獄ってヤツを、見せてやるよ」

その健二の言葉に間宮は一気に青ざめ、この部屋から一目散に出て行った。

「逃がすかよ」

健二が間宮を追いかけようとしたとき、後ろから声がかかった。

源次郎だった。

「健二、あの男にこの組の恐怖を骨の髄までわからせてやれ」

「はい」

それだけで呼び止めたのだろうか。源五郎らしくない。

「そして、必ず戻って来い。追いつめられた人間こそ、何しでかすかわかったもんじゃないからな。お前が戻ってこないと、瑞穂との結婚の話も進められない」

それは、思いがけない言葉で、待ち望んでいた言葉でもあった。

それは、つまり。

「あの男はもう用済みだ。つまり、お前らの結婚を反対する理由がなくなった。銃の件にしても、お前らの結婚にしても、他の組の問題など確かに色々とあるにはあるが、このワシにかかれれば造作ないま、ちと面倒くさいがな」

そう言つて源五郎は笑う。

「お父様っ！」

「組長っ！！」

「瑞穂、ワシだって、お前の幸せが一番だと思つているんだ。確か

に窮屈なこともあつたかもしれない。しかし、それはすべてお前のためだつたんだ。……解つてくれるか？」

瑞穂は嬉しそうに頷く。目には涙が浮かんでいるのが見える。

「そして、健二。『組長』はやめる。今はお前はここの組の者ではないのだから」

「お義父さんっー!」

「それは止める」

「よっし! それじゃ、さっさとあのバカ蛇とっ捕まえてきます!」

健二は部屋から出ようとした。しかし、瑞穂の呼びかけに体が止まる。

「健二さん、……あまり、待たせないでくださいね。ご無事を、祈っています」

顔を赤らめながら、そんなことを言う。反則級に可愛かった。

気が緩んだが、引き締める。

( さあ、覚悟しておけよ間宮。この組の恐怖、しっかりと味あわせてやるよ )

健二は間宮を追うために走り出した。

## 第9話 対面

久瀬信一は追いかけていた。

前を走る赤いスポーツカー。中には、如何わしい男と、あの女性銀行員。

何で自分が追いかけているのか。その答えはまだ出なかった。

それでも、信一はその車を追うために、スピードを出し続けた。いつたどこに向かおうとしているのか。この先にあるものといったら、こちら辺を牛耳っているらしいやくざの本拠地と、みんなから『死の森』と呼ばれている森くらいしかない。

死の森。正式名称は別にあるが、忘れた。そう呼ばれる理由は、その森での自殺が多いからだ。元々周りには民家も何もないため、中に入るのにも誰にも止められることはない。声は周りからは聞こえず、ひとりになるのは最適と言っているほどの場所だった。言い換えるならば、絶好の自殺スポットと言える。まさに、異質な空間であった。

そういえば、前もこの森で事件があった気がする。

そう思った信一だったが、突然、景色がよく見えるようになった。スピードが落ちているのだ。

(な、なんだ!?)

メーターを見る。ガス欠だった。ついには止まってしまおう。

「マジかよ……」

思わず呟いてしまった。

車は視界から見えなくなっていく。どんどん小さくなる。そして、視界から消えた。

どうすればいい。

とりあえず信一は、そのバイクを車道の脇に停めた。走るしかない。

車は曲がらなかった。おそらく、行き先は『死の森』だ。きっと。

たぶん。なんでそんなところに行くのかもわからないし、自分が行く理由もわからない。それでも、心はどこか嫌なものが渦巻いているのを感じていた。

信一はアスファルトを蹴るようにして走り出した。

まさか一日でこんなに走るようになるとは思ってもいなかった。

本来ならば銀行強盗をして終わっていたただけだったのに、何故こんなことをしているのか。

それでも信一はこの行動に、どこか充実していた。美春がいなくなつて以来、何も無い毎日だったからかもしれない。

走っていたら、急に曲がり角から出てきた人物と派手にぶつかつてしまった。お互い尻餅をつく。痛かった。無意識に閉じていた目を開けると、地面に転がっているピストルが目に入った。

まずい。

信一はとつさにそれを拾い、ポケットに入れた。ぶつかつた相手の男の方を見ると、その男も何か落としたのか、地面に顔を向け何かを探していた。少し目が悪いのかもしれない。

男と目が合った。信一は思わずひるんでしまった。

尋常じゃない目をしていて。追いつめられたような目。蛇のように、薄気味悪い。明らかに普通の人ではない。

その男も探し物を見つけたらしく、何かを拾い、ポケットに入れる動作をしていた。何を拾ったかまでは男の体が死角になり見えなかった。

その男は立ち上がると、こちらに鋭い目を向け舌打ちをし、急いで信一が来た方向の方へ走って行ってしまった。

いったいなんだつたのか。

そんなことを考えている場合ではない。信一が走り出そうとしたとき、向こうからまた男が走ってきた。やたら体格がでかい。もしかしたらヤクザかもしれない。少し恐くなる。

走ってきたデカ男は信一を見ると立ち止まった。

「おい、坊主。薄気味悪い男を見なかったか？ 蛇みてえなヤロウ

「なんだけだよ」

声も低く、ドスが効いている。間違いない。本物だ。坊主と呼ばれたことに何の違和感も感じなかった。それほど目の前の人物はでかく、威圧的だった。

「あ、は、はい。さっきそこを走っていきましたけど……」  
緊張で声が少し上擦ってしまった。

「そうか……。間宮のヤロウ。おい、呼び止めて悪かったな」  
そういうとすぐにその男はさっきの男が進んだ道へと走っていった。マミヤというのがさっきの男の名前なのだろうか。追いかけてもいるのか。

追いかける。そうだ。自分だってそうだった。  
信一は今度こそとばかりに走り出した。

死の森の入り口には、赤い車が停めてあった。やはり、ここだったか。少し安堵した。

中に入ると、あのふたりがいた。

まだ、信一には気づいていないようだった。

女のほうはただボーっとしている。その虚ろな目は焦点が合っていないようにも見えた。首筋が赤くなっている。

男は手にナイフを持っていた。鋭利で、微かな日光で光っていた。男はそのナイフを振り上げる。女のほうに向けて。

（ウソ……だろ？）

目の前で起きている光景が信じられない。これは、殺そうとしているのか。なんで女は何も抵抗しないのか。

その女の顔が見えた。その瞬間、その女に信一の目は奪われた。

(美春　！？)

細い眉。大きめな瞳。高い鼻。柔らかそうな唇。綺麗な黒い長髪。信一の妹　殺された妹の美春にそっくりだった。それは本人と間違えるほどに。

なぜ自分が追いかける気になったのか。助ける気になったのか。理由が、今、解った。女性銀行員と美春の姿が被って見えたのだ。無意識の内にそう感じていたのだらう。だからこそ、助ける気になった。本当の美春を、助けることができなかつたから。その美春に似た女性が、今、殺されようとしている。気づいたら、信一は男に向かって体当たりをしていた。

突然の来訪者の攻撃に、男は倒される。

女は目を見開いて驚いていた。

「あ、あなた。で、でもどうして？　なんで？　え？」

箱を盗んだ張本人がこの場に現れたことを、その張本人が今したことを、女は理解していないようだった。自分だつてまだよく理解していない。

「なんだ……テメエはよ……」

男はゆっくりと立ち上がる。動作ひとつひとつが恐ろしく見える。手にはまだナイフを持ったままだ。

「死にてえか？　あ？」

目は狂人な目をしていた。その目を見ただけで、鳥肌が立った。何なんだ、この男は。

「いいぜ。死にたいなら来いよ。なあ。すぐに気持ちよくさせてやるからよ。まあ、俺の邪魔した時点で、死ぬことは確定してるけどなあ」

男はうすら笑っている。何を考えているのか。

男がゆっくりと近づいてくる。手にはナイフ。

「まず、お前から殺しとくか」

逃げたいとは思わなかつた。それよりも、この人　この美春に似た女性を、助けたい。そう思った。

信一は思いっきりその近づいてきた男の頬を殴った……はずだった。

しかし、その男は信一の腕を掴み、止めていた。ナイフは地面へ落としていた。

「調子乗ってんじゃないよ」

ボキッ。

不快な音が鳴った。右腕には、衝撃が走った。わけがわからない。右腕が、ブラブラと見たことがない形で曲がり、揺れていた。

そこで、初めて気づいた。右腕が折られたということに。それが解った途端、激痛が信一を襲った。

「うああああああああああっ!!」

折れるというのはこんなにも痛いものなのか。不覚にも目に涙が浮かぶ。歯を食いしばる。痛い。痛い。痛い。

「はは。大げさだなオイ。次は右足でも折ってやるか？」

楽しそうに笑う。

狂っている。

そして、耳を疑った。右足まで折る？ 腕一本折れただけでここまで痛いのに、さらに一本折るといつのか。信じられなかった。理解できなかった。目眩と吐き気がする。

「やめてっ!!」

女の叫び。あの美春似の女だ。

「何なのよ、あなた……。どうしてそれも簡単に人が傷つけられるのよ……。狂ってるわよ!!」

「ああ、そうだな。俺は狂ってるよ。何だ。そんなことに今気づいたのか？」

顔にはまだ笑みが浮かんでいる。

「キミ！ 早く逃げて!!」

女は信一に向かって叫んだ。

「早くっ！！」

無理だった。とても走れる状態ではないし、何より逃げたくなかった。もし自分が逃げたらこの人はどうなる？ かと行って今の自分に何ができるのか。

息が荒くなってくる。痛い。辛い。でも、逃げたくない。

「逃がすかよ」

男は信一の髪を掴んだ。

女の不安そうな顔が目に入る。目線を下げると、女の足は鎖のようなもので木と繋がれているが見えた。この男が繋いだのだろう。逃げられないように。恐怖を味あわせるために。美春もそうやって殺されたのだろうか。

美春。

美春の顔、そして、目線の先にいる女性の顔が頭に浮かぶ。

誰か。誰でもいい。俺はどうなってもいいから、誰か誰か彼女を助けてくれ。

そのときだった。

「やめろおっ！！」

知らない声の叫び。男の声。

誰かが、来た。誰だかは解らなかったが、誰でも良かった。

この人を、救ってくれれば、それでいい。

男が髪を離す。その狂っている男はさっきよりも嬉しそうな顔をしていた。

「桜井さんじゃねえか」

男はそう言った。サクライ？ それが今来たこの男の名前だろうか。

……どうだっていい。とにかく、美春 この女性を、助けてください。

信一はそれだけを、ただ祈った。

人間交錯

## 第10話 悪夢

折原志保は空虚だった。

神代の赤いスポーツカーに無理矢理乗せられ、降ろされ、森へ連れてこられていた。

(この森は……)

立つのも億劫でへたり込み、うつすらとした意識の中で、志保は思い出す。

そうだ。この森は。

過去の光景が頭を過ぎる。

赤く染まった草。泣き声。悲鳴。死体。呻き声。返り血を浴び、笑みを浮かべ立ち尽くす男。神代慎吾。身の毛がよだつ。頭が痛い。背筋が冷たくなる。

この場所は 間違いない。

以前、惨劇が始まりそして終わった場所。『死の森』。そう。終わったはずだった。志郎の手によって。

けれど、今。志保の目の前にはその神代が立っている。夢ではない。現実だ。

まだ終わっていない。

吐き気が志保を襲う。全身が重い。

逃げたい。一刻も早く。この悪魔から。

足に力を入れる。しかし、違和感を感じた。ふと足元を見ると、何やら鎖のようなもので大木と繋がれていた。

いつの間に。気づかなかった。それほど自分は意識はハッキリしていないのか。

「おい」

上から声がした。記憶の片隅にしまい込んでいた持ち主の声。

「もう一度、チャンスを与えてやるよ。俺に金を譲渡するか、お前の家に俺を少し住ませるか、この場で死ぬか。3つにひとつだ」

何をいつているのかこの男は。答えは決まっている。

「どれも嫌」

この答えが変わることはない。

「交渉決裂、だな」

ひとつため息をつき、神代は志保の首に手をかけた。

「じゃあな」

神代の手に力が込められる。一瞬で苦しくなる。息が出来ない。

頭が真っ白になる。苦しい。

そのときだった。突然、力を感じなくなった。首に手を当て、少し咳き込む。何が起きたのだろうか。

神代が倒れているのが目に映った。なぜだろう。何が起きているのだろう。目の前には、志保にとって信じられない人物が立っていた。

昼。志保から志郎へのプレゼントを盗んだあの青年だった。

驚きのあまりしばらく声が出なかった。

「あ、あなた。で、でもどうして？ なんで？ え？」

やっと声が出る。けれど、わけはわからないままだ。

「なんだ…… テメエはよ……」

神代が起き上がる。突然のこととはいえ自分が倒されたことに対する怒りを表情に出していた。

「死にてえか？ あ？ いいぜ。死にたいなら来いよ。なあ。すぐに気持ちよくさせてやるからよ。まあ、俺の邪魔した時点で、死ぬことは確定してるけどなあ」

そして、微笑を浮かべる。神代が笑うとき。それは獲物を見つけた時。そして、誰かを痛めつけるとき。危険の合図だった。

それはあつという間だった。

志保には、依然として何が起きているのかわからない。

ただ、わかったこと。それは、青年の腕の骨が折られたということ。

ボキッと、不快な音が鳴った。

「うあああああああつ!!」

青年の叫び声。

叫び声。

過去の光景がまた頭に浮かぶ。

叫び声。追いつめられた人。そして。

「やめてっ!!」

自分でも気がつかないうちに叫んでいた。

体が拒絶反応を起こした。

「何なのよ、あなた……。どうしてそうも簡単に人が傷つけられるのよ……。狂ってるわよ!!」

神代は笑う。何か言っているが、そんなことは耳に入らなかった。そんなことよりも、この青年だ。

「キミ！ 早く逃げて!!」

志保は青年に向かって叫んだ。

しかし、青年は逃げようとしなかった。痛みで逃げられないのかと思ったが、どうやら初めから逃げる気がないらしい。

どうして

志保は混乱していた。

「逃がすかよ」

神代が青年の髪を掴む。

もう嫌だ。何でみんな傷つかなければいけないのか。なんでこんな目に遭わなければならぬのか。

志保にとって、今は暗闇そのものだった。

しかし。

「やめろあつ!!」

声が出た。凜々しく透き通った。それでいて芯が入っているこの声。間違いようがなかった。この声は。

「桜井さんじゃねえか」

神代は青年の髪を離し、そう嬉しそうに呟いた。

そう。桜井志郎。志保にとって、ずっと、待ち望んだ人だった。

どうしてこの場所がわかったのか。色々とわからないことはあったが、志保は体の力が抜けていくのを感じていた。

(志郎くん)

「ハ。……ハハハ。まさかまたアンタに会えるとはなあ。しかもこの場所で。運命ってヤツか？」

神代は笑いながら話す。

志郎は志保のほうへ顔を向けると、目を見開き、すぐに神代の方向へ顔を向き直した。

「お前……。志保に何をした」

それは、怒りの感情が混ざった声。

また喉が苦しくなり、咳き込む。ふと、足元にナイフが落ちているのが目に入った。神代が持っていたナイフだろう。

ナイフ。

手を伸ばす。届いた。指先が冷たい柄に触れる。それを手に取り、大木と繋がれている鎖へと向けた。ふたりのやりとりが聞こえるが、内容までは耳に入ってこなかった。思ったよりも簡単に切断できた。これで自由に動ける。

神代と志郎のほうを見ると、信じられない光景が目に入った。

志郎が神代に首を絞められ持ち上げられていた。

(志郎くん　っ！)

指先が冷たいことに気づく。まだナイフを持ったままだった。ナイフ。

神代は、ちょうど志保に背を向けている。

意識がぼんやりとした。

無意識のうちに、志保は刃先を神代に向け、向かって行っていた。

## 第11話 逆鱗

桜井志郎は考えていた。

目の前で起きているこの状況に。

志郎が死の森に着いてすぐに、ある光景が目に入った。

神代慎吾が見知らぬ男の首を絞めている姿。

「やめろおっ!!!」

気づいたときには、声を張り上げていた。

突然の志郎の声に神代は志郎の方を振り向く。

志郎の顔を見た神代の表情が、緩くなるのがわかった。

「桜井さんじゃねえか」

嬉しそうに呟く。神代の目を見た志郎は凍りついた。狂った目をしていた。明らかに覚醒剤をやっている目だ。危険だ。たちが悪い。神代は今の今まで首を絞めていた男を離す。男はそのまま地面に倒れた。男の腕が変な方向に曲がっている。折られたのか。この男に。

志郎の不安は大きくなる。

志保は。志保はどうしたんだ。

「ハ。……ハハハ。まさかまたアンタに会えるとはなあ。しかもこの場所で。運命ってヤツか？」

こんな男よりもまずは志保のことが大切だ。無事なのか。それとも。

いた。志保の姿が目に入った。生きているということ。当たり前の、たったそれだけのことなのだが、安堵の息が出た。

しかし、無傷ではなかった。頬は赤く腫れているし、首にも手の跡がついている。足は鎖のようなもので木に繋がれていて、とても身動きできない状態だ。

志郎の精神が、少し乱れた。

「お前……。志保に何をした」

怒り。志郎の感情はその感情で満たされていくのを感じていた。  
「別になにもしちやいなえよ。それよりせつかくに久々の再開なんだ。もつと気の利いたことは言えないのか？」

何を言っているんだこいつは。

「お前がさつきまで首を絞めていた男は誰なんだ」

神代は鼻で笑う。

「知らねえよ、俺だって。ホントだぜ？ 急に割り込んできやがったんだよ」

「……お前がどうしてこの場にいる。お前は捕まったハズだろう」

「ああ。そんな時はお世話になったなあ、志郎さん」

「質問に答える！」

志郎の声が荒くなる。志保を傷つけたという時点で、怒りは限界まで達している。その感情を志郎は無理矢理に押し込んでいた。

「冷静になれって。……どうして俺が、こんな俺がノコノコとここにいるのか、だよな。答えは簡単だ。警察なんてみんながみんな綺麗なわけじゃねえってことだ」

「なんだと？」

「自分の立場や自分の身が危なくなれば、簡単に殺人犯でも悪魔でも解放してくれるヤツもいるってことだ。俺の仲間が上手くやってくれたよ。あれで正義っていうんだから、笑わせてくれるよな」

神代は本当に笑っている。それはまるで、悪魔の微笑み。

「アンタに捕まえられたあの日から、俺はずっとアンタに逢いたかった。どうにかして、アンタを殺したかった」

「それはこっちの台詞だ。もう二度と馬鹿なことができないように、殺す」

「おいおい。警察官がそんなこと言っているのかよ。ま、そうでなくちゃ面白くないけどな」

元々今日は休日だった。手錠も銃も何も無い。

だが、この男 神代だけは、この場で、この手で、叩きのめす。「そっぴや桜井さん、さつきアンタ、アイツのことを『志保』って

呼んでたよな。なに？もしかしてそういう関係にでもなったの？」

馬鹿にするように言ってくる。実際、馬鹿にしているのだろう。「そんなこと、関係ないだろう」

「あるさ。なんせ俺はアイツの元恋人だしな」

「何が元恋人だ」

実際はもつとひどいものだっただろう。志保の体にも、心にも大きなキズを負わすほどの。

こんな男のせいでなんで志保が悲しまなくてはいけないのか。

「いいけどよ。別に。俺のお下がりでいいんならやるよ」

その言葉を聞いて、志郎はキレた。制御なんて糞食らえだ。志郎の胸元に飛び込む。腹に蹴りを一発。急所に入る感覚がした。そして。

「そこが、アンタの悪いところ、だよな」

「がっ……」

一瞬。最初は、何が起きたのか、起きているのかわからなかった。志郎は神代に首を絞められていた。

「ぐうっ……」

馬鹿げた力だった。これは締められているなんて生易しいものじゃない。潰されている。

「桜井さん、冷静なときは恐いけどよ。感情を乱せばこの通り。行動も読みやすい」

心底嬉しそうにわざわざ説明をする。

思いつき蹴りは入れた。確かに急所に入った。だが、クスリのせいだろうか。神代は、痛みをまったく感じていない。精神が肉体を凌駕している。

だんだんと意識がぼやけてくる。

（ふざけんな。俺がいなくなったら、誰が志保を）

目の焦点も定まらない。志保の顔が見たかった。

「なにしてるんだっ！！」

突然、聞き覚えのない声がした。

とつさのことに神代も驚いたのか、神代の腕の力が少し抜けた。ぼんやりとした意識の中で、目に入った光景。さつき神代に首を絞められていた男が、志保と一緒に倒れていた。志保の手にはナイフが握られている。志保を拘束していた鎖のようなものは切れていた。

なんなんだ。なにがどうなっている。

視線を変えると神代もそちらに気を取られているのがわかった。

チャンスだ。

歯をくいしばり、今の状態での渾身の力で神代のアゴに拳を入れる。

「っ！！」

神代は突然の衝撃に驚き、手を離す。

志郎は急いで距離をとった。呼吸が激しい。上手く息が出来ない。

「ははっ。やるなあ、志郎さん。さすが　っ！？」

神代の膝がガクガクと震え、折れ、自然な動作でその場に座り込む。

「な、なんだ！？　どうなってやがる！！」

アゴは人間にとって弱点だ。アゴへの強い攻撃は脳へ伝わり、体の足の自由を奪う。とはいえ、それもほんの一刻。時間が経てば効果はなくなる。

志郎は息を整える。まさに、今が　この時こそチャンスだ。

ふと、足元を見る。銃が落ちていた。さきほどまでは何もなかった場所に。

(どうということなんだ……？)

わけがわからない。

少し目を離していた、その一瞬だった。

「志郎さん、そのままだ。動くんじゃねえ」

顔を上げると、神代が志保の首筋にナイフの刃先を当てていた。

志保の顔は蒼ざめている。目は宙を見つめている。

「お前つ……!!」

なんて回復力だ。まさに化け物。悪魔。

「また捕まるわけにはいかないんでな。アンタへの復讐は後だ。とにかく、今は逃げさしてもらうぜ」

神代はまだ笑みを浮かべている。

志郎は頭が痛くなつた。志保の怯えた顔を見て、鼓動が大きく揺れた。

ふざけるな。逃がしてたまるか。それも志保も一緒に。

神代が志保にナイフを構えたまま、後ずさる。

どうする。志保に怪我をさせたくはない。しかし。

志保と目が合う。

(志保……)

それだけで、十分だった。気持ち伝わってきた。同時に勇氣も力もみなぎる。そして、ある決意も。

(志保、俺を信じろ!)

志郎は素早い動作で落ちていた銃を取り、そして、引き金を引いた。

## 第12話 邪魔

黒崎健二は走っていた。

今日はやたら走っているような気がした。

健二が走っている理由は、もちろん間宮を捕まえるためだ。間宮さえ捕まえればあとは……。

瑞穂の笑顔が頭に浮かんだ。あとは……バラ色だっ！

だが、しかし。その肝心の間宮はどこへ逃げたのか。源五郎と話していた間に間宮はすっかり姿をくらましていた。もし、間宮を逃がすなんてことがあれば……。

源五郎の顔が頭に浮かんだ。あれば……えらいことに……。一気に健二の気分が重くなった。

そんなとき、健二の前にひとりの人間が立ち尽くしているのが見えた。ヤクザの本拠地と薄気味悪い森しかないこんなところに人がいるのは珍しい。男だ。大学生くらいだろうか。健二はダメもとで声をかけた。

「おい、坊主。薄気味悪い男を見なかったか？ 蛇みてえなヤロウなんだけだよ」

「あ、は、はい。さつきそこを走っていききましたけど……」

大学生風の男は、怯えながら言った。

やはり自分は恐く見えるのか。

ヤクザを辞めた健二にとって、その事実が少し悲しかった。

いや、そんなことよりも間宮だ。どうやらここを通っていったらしい。

「そうか……。間宮のヤロウ。おい、呼び止めて悪かったな」

一応、礼を言って、健二はまた走り出した。

ふと振り返ると、大学生風の男も森のほうへと走っていた。きつと今の自分と同じように、大変な一日を送っているのだろう。健二は勝手にそう思った。そして、そのとき、なぜか突然自分だけが仲

間外れになったような気がした。それがなぜか、健二にはわからなかった。

路地裏に、間宮はいた。

狭く、暗く、薄気味悪い。そして怪しい場所だった。そこに間宮は堂々と立っていた。まるで健二が来るのを待っていたかのように。「なんだ。逃げたんじゃなかったのか？」

「ふん……。あなたとふたりつきりになりたかったんですよ」  
「気持ち悪いな。どうしてだ」

「あなたひとり相手なら、返り討ちにできますから」

間宮は表情を変えず、依然として冷徹な表情で言った。暁邸から逃げ出したときの狼狽した様子は、今はもう見えない。

「笑えない冗談だな」

「それはそうでしょう。冗談じゃありませんから」  
平然と答える。その態度に健二は少しイラついていた。

「お前は知的派だ。頭が良いだけだ。そのお前が、俺に勝てるってか。寝言は寝て言いやがね。バカ野郎」

「バカはどっちですかね。あなたが組を辞めて半年。その半年間、あなたは平和で健全でつまらない生活を過ごしていたことでしょうか。しかし、私はこの半年間、いくつもの死線をくぐってきました。あなたとは違って、ね」

「……なあ。間宮。お前、頭まで悪くなったのか」  
間宮は鼻で笑う。

「黒崎さん、逃げるなら今のうちだと思えますよ」

「それはこっちの台詞だ」

「なんなら、勝負しますか？ 命の賭け合いを」

「ああ、いくらでもしてやる。死んでから後悔すんなよ」  
「言いますね」

間宮は首を左右に一度ずつ曲げ、ゆっくりと近づいてくる。無意識に上着のポケットをまさぐった。鍵束があった。それを取り出す。何も無いよりはマシだ。鍵の先がはみでるように右手を握った。腰を落とし、身構えた。

「いつつも、アナタは邪魔でした」

間宮が短刀を振りかざし、突進してきた。

(遅えっ！)

右に移動してかわし、鍵の先端を間宮の側頭部に振り下ろす。近すぎて空振りだった。やはり、久々の格闘なので感覚がイマイチだ。間宮はすぐさま体勢を立て直すと、また向かってきた。

今度は避けきれなかった。短刀はかわしたものの、間宮の右肩が胸に当たり、健二は大きくよろけ、そのまま地面に転がった。

身体を起こす。その途端、間宮に身体を倒された。間宮の鼻息が顔にかかる。距離を置いたら刺されると思った。

健二の頭突きが間宮に入る。視界に銀粉が舞う。間宮は悶えていた。

息を整え、立ち上がる。

そのときだった。

後頭部に突然、強い衝撃が走った。

「がっ……はっ……」

何が起きたのかわからなかった。膝が折れる。振り返ると、見たこともない男たちが立っていた。4人はいるだろうか。ひと目でわかる。一般人じゃない。

「糞野郎っ……！ なにが『ふたりつきり』だっ……！」

油断していた。

間宮は仲間を連れて待ち伏せしていたのだ。さっきの堂々した態度もそういうわけか。

まったくの無防備のときに、もろに攻撃を受けてしまった。

男たちは一気に健二に向かってくる。そいつらの隙間から、立ち上がった間宮の顔が目に入った。勝利を確信したかのような笑み。

（ 糞がっ！！ ）

間宮はふところに手を入れ、何か取り出した。

拳銃だった。

しまった。

それに気を取られている間に、顔や腹を男たちに殴られる。

「ごぶっ……！」

間宮は拳銃の引き金に手をかけた。

「それでは、黒崎さん」

ニッコリと微笑んで、間宮は引き金を引いた。

### 第13話 疑問

久瀬信一は祈っていた。

突然現れた男。その男が、この美春に似た女性を助けてくれる存在であるということ。

男は、今の今まで自分の首を絞めていた男と、なにやら口論をしている。

腕の痛みがひどいためか、信一の意識はハッキリとせずふたりの男が話している内容がわからなかった。

ふと、倒れたままの状態で見ると、美春似の女性が立ち上がっていた。足に繋がれていた鎖は切れている。なんだ。どうして。

すると彼女はおぼろげな手つきでナイフを構えた。その鋭く光る眼光と刃先は、暴力男の方へと向けられている。つい先ほど来た男は、その暴力男に首を絞められていた。

（まさか 殺すつもりなのか！？）

信一は、無我夢中で飛び起き、女に身体を当てた。その瞬間、激痛が信一を襲ったが、痛みはまだ頭は回らなかった。

女とともに、再び地に倒れる。そのはずみで、ポケットに入っていたモデルガンがどこかへ滑っていった。

「なにしてるんだっ！！」

信一はナイフを持っていた女の腕を掴み、叫んでいた。

すぐ目の前にいる女は、困惑した顔で信一を見ていた。

「どうして邪魔するのよっ！ このままじゃ志郎くんがっ……！！ 離してっ！ 離してよおっ！！」

女はもがく。けれど、所詮女の力だ。片腕が折れているとはいえ、なんとか抑えられる。必死の表情だった。見ていて辛くなるくらいに。美春の顔が頭に浮かぶ。

「あなたが…… あんなヤツを殺して手を汚してどうするんですか！

それで、本当に、あなたはいいんですか!!」

女の顔色はほとんどなかった。唇をわななかせている。果たして信一の言葉は届いているのか。

「あなたが人を殺して……誰が幸せになれるんですか!!」 日常からあなたがいなくなったら、残った人の気持ちはどうなるんですか!!」

女の目線はどこにも合っていないかった。

突然、女が立ち上がった。いや、起こされた。

女を起き上がらせたのは、あの狂った男だった。相変わらずの憎たらしい笑顔だが、先ほどとは違い少し苦痛の表情を出していた。

すると男は突然女の首筋にナイフの刃先を当てた。

「なにをっ……!!」

信一は起き上がろうとするが、起き上がれなかった。既に痛みはピークに達している。

(クソッ……!! 美春 !)

信一が自分の無力に憤っていたとき、変な音がした。そちらへ視線を向けると、さっき来た男が信一のモデルガンを拾って構えているところが目に入った。

バカな。それはモデルガンなんだ。偽物なんだ。良く出来たレプリカなんだ。そんなものを使ったところで何になる。彼女を救えるわけがない。外見だけの、中身なんて空虚な銃なんだから。

もしあれが本物の銃だったら、彼女を救えたのに。信一がそう思った、そのときだった。

パアアンツ!! と一発の銃声が響き、気づいたときには暴力男が悶絶とした表情で足を押さえ、声にならない悲鳴を上げ、倒れこんでいた。

それを見下ろす形になっていた美春似の女は目を大きく剥き、驚愕の表情をしていた。怪我などはしていなかった。

なんだ。何故。あの銃は偽物なのに。  
わけがわからなかった。

撃たれた男は苦痛に歪んだ顔で、苦痛に満ちた声を上げ、ゆっくりと立ち上がった。

(嘘だろ　！？)

なんで足を撃たれてまだ立ち上がれるんだ。なんで動ける。

しかし、そこを銃を撃ったさっきの男が近づき、その男の横面を思いつきり殴り飛ばした。

男は宙に浮き、血を吐き、地へ落ちた。そして、気を失った。

信一は思った。

ああ、そうか。やっぱりこの男はこの女の救世主だったのか。男は、今さっき男を殴ったその腕で、今度はやさしく女を抱きしめた。

ふたりして何か話している。感動の再開かなにかなのか？

(俺は無視か)

まあ、美春に似たあの女性が無事ならそれで信一は満足だったのだが。

信一は久々に笑顔になった。

「キミ、大丈夫か？」

男がこつちへ向かってきた。なかなか凜々しい顔だ。女はその男に支えられている。

「ええ、まあ……」

「キミにも色々訊きたいが、とりあえず、病院へ行くのが先だろう。その様子じゃ、折れてるんだろ？　腕」

男は自分の腕を出して軽く微笑む。笑い事じゃない。けれど、信一も自然と笑顔になった。それはきつと、お互いの想いが一緒だったから。

『彼女を護りたい』という想い。

男の手を取り、立ち上がる。

(これで、終わったんだよな。彼女は、救われたんだよな)  
心の中で呟く。

そのとき、茂みから突然音が聞こえてきた。

(まさか、撃たれたあの男の仲間か　！？)

冗談じゃない。

茂みから、ふたりの男が飛び出してきた。

「お前ら……。どうして……」

救世主の男は困惑した様子で呟いた。

誰なんだこいつらは。まだ、終わっていないというのか　？

信一の腕は、また痛みだした　。

## 第14話 解放

折原志保はぼんやりしていた。

(私……、何をしてるんだっけ)

志保の手にはナイフが握られていた。

(ああ、そうだ。刺さなきゃ。これで)

落ち着け。落ち着け。自分に言い聞かせる。

早く済ませよう。早くあの男を刺さなければ。

そのとき、目に映るものが突然回転した。

地面に倒れこむ。そのまま誰かに腕を掴まれた。頭の中が真っ白になった。

「なにしてるんだっ!!」

目の前の青年は、そう叫んだ。

なんなんだ、この子は。そうだ。もとはと言えばすべてこの青年のせいではないか。この青年が志郎へのマフラーさえ盗まなければ、なんでまた自分の邪魔をするのか。今から神代を殺さなければならぬのに。なんで。どうして。

「どうして邪魔するのよっ!! このままじゃ志郎くんがっ……!! 離してっ! 離してよおっ!!」

咄嗟に青年を払いのけようとしたが、女の力ではとても勝てなかった。

頭の中が真っ白になった。気が遠のくような感覚が背骨から脳天にかけて走る。

青年が何か叫んでいるが、何も聞こえない。けれど、静寂ではなかった。

そもそも自分は今どこにいるのだろう。確か朝が銀行で働いていて。

誰かに腕を掴まれ身体を起こされた。

この男は。見覚えがある。そうだ、神代だ。

神代の目が光って見えた。

神代の右手には冷たく光る短刀が握られていた。志保はそれをガラス越しのような光景で眺めている。

自分は殺されるのだろうか。逃げたほうがいいのか。

いや、それどころではない。自分にはもつと大切なことがあったはずだ。

志保は、麻痺したような頭で、それが何だったかを、懸命に思い出そうとしていた。

その瞬間。

パアアンツ！！

甲高い音が鳴った。

それと同時に、スローモーションのように神代が地面に突っ伏す。今度は何が起きたのか。

志保はぼんやりと足元を見つめていた。

神代がゆっくりと立ち上がる。その神代の面を、誰かが思いつきり殴り飛ばした。

神代は血を吐き、そのまま再度地面に落ち、気を失った。

その男の顔からは、さっきまで見せていた悪魔の面影はひとつも感じられない。

「志保！」

突然、名前を呼ばれ、強い力で抱きしめられた。温かい。

「志郎……くん」

そつだ。志郎だ。

また、志郎が自分を絶望から救ってくれた。手を差し伸べてくれた。今日、何があったのか。さっき、何があったのか。よく思い出せない。

けれど、自分が何かおぞましいものから『解放』されたという感覚だけはあった。もう、辛いことはすべて終わったんだ。繋がれて

いた鎖は切れたんだ。

志保は志郎の背中に手を回し、強く掴んだ。

自分にとって大切な存在を、ただ確かめたかった。

志郎の腕と安堵感に包まれながら、志保は意識を失いかけてしまった。疲れていた。

薄れゆく意識の中、志保は思った。

(そうだ。今日は志郎くんの誕生日だ)

志保は微笑みを浮かべ、志郎に抱きしめられながら静かに寝息をたて始めた。

## 第15話 殺意

桜井志郎は銃の引き金を引いた。

パアアンツ！ と銃砲が鳴り、そこから撃ち出された弾は見事に神代の足の関節を貫通していた。

神代が倒れるのが、志郎の目に映った。

銃の扱いは得意だ。発砲に関して志郎は自身があった。志保にはかすりもしていない。よかった。

神代は獣のような呻き声を上げておぼろげな足つきで立ち上がる。

(そうこなくちな)

その憎たらしい面をぶん殴らなければ。

(お前は志保を傷つけた)

志郎は神代の元へ歩みよる。志郎を見つめる神代の目つきからは脅威などはまったく感じることはない。

右手を握り締める。その十分すぎるほど固くなった拳を神代の横っ面めがけて打ち付けた。かなりの手ごたえがあった。骨が割れるほどの衝撃。

神代は声もなく地面に突っ伏した。ぴくりとも動かない。殺したか？ いや、まだ死んでもらっては困る。それよりも今は。

「志保！」

志郎はすぐ側にいた志保の元へ駆け寄り、抱きしめた。恐怖も、不安も何もかも包み込むように抱擁した。

「志郎……くん」

志保はそう呟くと、そのまま瞼を下ろし気を失ってしまった。いや、眠っているだけか。よほど精神が錯乱していたのだろう。無理もない。

志保を抱きかかえたまま志郎はもう一度神代の方へ目を向けた。

(……)

そうだ。そういえば。

志郎はどこの誰かもわからない青年のことを思い出した。

「キミ、大丈夫か？」

志郎の問いかけに青年は覇気の無い声で答える。

「ええ、まあ……」

そもそもこの青年は何者なのだろうか。神代の仲間には見えない。青年のさっきまでの行動は、志保を助けようとしていたように志郎には見えた。

今、志郎が持っているこの落ちてた銃ももしかするとこの青年の物だったのだろうか。ますます謎だ。だが、今は。

「キミにも色々訊きたいが、とりあえず、病院へ行くのが先だろう。その様子じゃ、折れてるんだろ？ 腕」

腕を見せて軽く笑う。青年も微笑み返した。やはり悪いヤツではない……と思う。

手を差し出し、青年を立ち上がらせる。近くで顔を見ると、どこかで見たとあるような気がした。

そのとき、茂みの奥からこちらへ何かに向かってくる音と気配がした。

（何だ！？）

志郎の目線の先から、ふたりの男が飛び出してきた。

「お前ら……。どうして……」

そのふたりは、志郎の部下の佐藤と木村だった。

「あつ、さ、桜井さん！ どうしてこんなところに！」

佐藤が驚いた様子で訊ねてくる。

「それはこつちが訊きたいぞ……」

「ハッ！ いや、私と佐藤は今日の昼頃に起きた葉桜銀行の強盗事件の犯人を春日警部補の指令により追跡中でありまして！」

ハツラツと軍人調に木村が答える。息苦しい奴だ。そういえば春日警部補もこのふたりに任せたとか言っていた気がする。

「ここら辺にいるのか？」

「いや、こここの近くの路上に強盗犯の物と思われるスクーターが乗

り捨ててありまして」

「そうなのか」

「ハッ！ まつことその通りであります……あああつ！！　そ、その男は！！　た、確か神代慎吾っ！！　如何にしてここにっ！！」

「あー……、まあそれは後で詳しく話すとしてだな。丁度良かった。お前ら、彼とこっちの彼女を病院に送ってやってくれないか」

青年と志保を指差す。

「でも桜井さん。僕たちも仕事が……」

「まあ、それは俺が春日警部補に上手く言っとくからさ。頼む。一生のお願い。な」

「何度目の一生のお願いですか……。まあ、桜井さんの頼みじゃ、断れませんがどね」

苦笑し、「断っても引き受けるまで言ってくるでしょうし」とため息混じりに言う。流星は自分の部下。よく解ってるじゃないか。

「あの！　桜井刑事！　その男　神代はどうするのでありますかっ！！」

「ああ、こっちは俺がどうかしとく。だからお前らはそのふたりを早く病院に連れて行ってくれ。俺はまだやり残したこともあるしな」

「そうでありますか……。了解でありますからして」

残念そうに木村が呟く。何を期待していたんだこいつは。

志保と青年を連れて佐藤と木村は病院へと向かった。

志郎は、いまだ気を失っている神代を見下ろす体勢になった。

（そうだ。俺にはやり残したことがある）

再度、志郎は銃を取り出した。

（お前は志保を傷つけた。たとえ国が許しても、たとえ法律が許し

ても。俺は（  
志郎は銃口を神代のごめかみに当てた  
。

## 第16話 最期

間宮は混乱のあまり息が出来なかった。

何故だ。何故、弾が出ない。

健二へ向けた銃の引き金を何度引いても弾は発射されない。

そんな馬鹿なことがあるか。あつてたまるか。

「どうして……」

真つ青な顔で呟く。

確かに弾は一発詰めたはずだ。銃口が詰まっている様子もない。

では、何故。

間宮は気づいた。これは　この銃は、自分が持っていた銃ではない。

身体が打ち付けられたような音と、数人の呻き声が聞こえた。

間宮はピストルから目を離した。

「終わりだ、間宮！」

視界には、健二の拳だけが映っていた。

その一瞬。間宮はある人物が頭に浮かんだ。

ここに来る途中にぶつかったあのガキ。

思えばあのガキも銃を落とした自分同様、何か落としてそれ自分より早く拾い上げていた。

もしかしたら、あのガキも銃を持っていて、あの時に入れ替わったのか？

それこそ馬鹿な考えだ。どうしてあんなガキが銃を持っているというんだ。どうして、そんなガキがたまたま銃を持っていた自分とぶつかって、たまたま銃が入れ替わったというのか？

とんだ偶然だ。そんな馬鹿なことがあるか。あつてたまるか。  
間宮の視界は暗闇につつまれた。



その気配を感じたのか、間宮は夢中にいじっていた銃から目を離した。

「終わりだ、間宮！」

健二は、間宮の顔面目掛けて拳を放った。

(終わった)

健二はひとり、その場で立ち尽くした。正確には、他の男たちがただ倒れているだけだが。

一度、大きく深呼吸をする。

思えば、長くて大変な一日だった。ヤクザをやった頃を思い出すくらい。

冷たいものが顔に当たる。

雨。雨が降ってきていた。

しかし、それとは裏腹に健二の気持ちは快晴だった。

あとは、帰るだけだ。そして、瑞穂と。

背中に何か当たった。雨ではない。うしろを見る。いつのまにか立っていた間宮の顔がすぐ肩越しにあった。

目が合った。瞳に炎が映り込んでいる。瞳孔が開いているのがはっきりとわかった。

「へ……へへ……。道連れですよ。黒崎さん……」

間宮は弾かれるように健二から離れ、そのまま気を失い倒れこんだ。

間宮の両手には短刀が握られていた。

健二は恐る恐る背中に手をやった。手のひらに、べっとりと血が付着していた。

(ふざけんな糞ヤロウ)

健二の膝が折れる。

(俺には、帰りを待っていてくれる人がいるんだ )

『健二さん、……あまり、待たせないでくださいね。ご無事を、祈っています』

(ああ……、絶対に、帰るから。絶対に。絶対、戻るから )  
健二はそのまま雨で濡れた冷たいアスファルトの上に頭から倒れた。

## 第17話 恐怖

神代伸吾は顔に冷たいものが触れた感触で目を覚ました。

雨。雨が降ってきた。水滴が神代の全身を濡らす。

(オレ、は……?)

なぜ空を見上げているのか。なぜオレは横になっているのか。ここはどこだ？ 外？ なぜ、なぜ、何故？

頭が上手く働かない。とりあえず起き上がるうと足に力を込めた瞬間、激痛が走った。

「うぐっ……！」

思わず声を上げてしまう。なんだこの痛みは。熱い。痛い。

「よお。お目覚めか？」

神代は気づいた。顔に触れた冷たいもの。それは、雨なんかじゃなかった。こめかみには、ピストルの銃口が当てられていた。

これだ。そして、この声。

停止していた頭がひねられた蛇口から出る水のように勢いよく活動し始めた。自分がさっきまでやっていたこと。そして、されたこと。今、されていること。

今、神代にピストルを当てている男は、誰でもない。桜井志郎だった。

「あんた……」

「おはよう」

ゾクリ、とした。ピストル同様、冷たい笑顔。

そう感じていることを悟られないよう、神代は視線を外した。

「逮捕すんのか？ いいぜ。さっさと逮捕しろよ。どうせオレの足は今、使いもんにならねえし」

神代は言った。もちろん、素直に捕まる気は微塵もない。なんとかして脱走してやる。この状況を打破してやる。

「悪いが、今日は警察の仕事は休みでな。手錠も持ってないんだ」

じゃあ、なんでピストルなんか持ってやがるんだ。

「だから、俺は『警察官』ではなく、ひとりの『人間』として行動する」

「あア？」

言っている意味がわからない。

しかし、次に志郎の口から出た言葉はそれ以上に意味がわからない言葉だった。

「これから、お前を殺す」

辺りは静まり返っている。

雨の音すら、ハッキリと聞こえない。

今、この男はなんて言った？ 『コレカラ、オマエヲコロス』。

殺す？

「ハ……ハハ。本気かよ。なんの冗談だよ、志郎さん」

「冗談に聞こえたか？ そいつは心外だな」

違う。冗談なんかじゃない。目を見ればわかる。こいつは、本気だ。本気で俺を殺す気だ。馬鹿な。馬鹿な。馬鹿な。馬鹿な。

「アンタ……警察官だろ。いいのかよ。そんなことして。問題になるんじゃないか？」

何を言っただって無駄だろう。しかし、何か言わずにはいられない。言っただろ？ 『警察官』ではなく、『人間』として行動すると

こめかみに当てられたままの銃口が更に冷たくなった気がした。

「何言っただろ！ アンタが刑事だつてのには変わりはないだろ

！ 銃も持ってない人間を撃つていいわけがねえ！！ そんなことしたら、アンタ！ 大問題だ！！ だから撃つな！！」

「下衆野郎……」

「……なんだと?」

「散々、何人もの人を傷つけといて、自分が酷い目に遭いそうになつたら命乞いか? 最低の悪党だな」

「ぐっ……」

なんて目をしていやがる。

「お前……言つてたよな」

志郎が問いかける。何を。

「『警察なんてみんな綺麗なわけじゃない』ってな。俺も同意見だよ。なかには、自分の利のためだけに殺人犯を解放するヤツだっているだろうし、もしかしたら、何の抵抗もしない男を、自分のために何の躊躇もなく撃ち殺すヤツだっているかもしれない」

「なあ……、待てよ。少し落ち着けて。アンタ、今、少しおかしくなってるぞ」

神代の言葉に志郎は軽く笑って、言った。

「まさかお前にそんなこと言われるとはな。でも、まあ……おかしいのはお互い様じゃないか?」

駄目だ。コイツにはもう何を言っても収まらない。オレを殺すまでは。

神代は唾を飲んだ。ごくり。

「なあ。頼む。頼むから待ってくれ……」

搾り出すように声を出した。志郎は微動だにしない。

「確かにオレは今まで、たくさん……色々、やったかもしれねえ。

いや、やった……と思う。けど、けどな。殺されるほどのことか?

なあ、志郎さん」

「ああ」

簡単に答える。

「神代。俺は、志保が好きだ。今も、そしてこれからも、ずっと

」

「……は?」

いきなり何を言いだすんだこの男は。

「だから、俺は、その志保が傷つくのを見たくない。傷つけたヤツを許せない。殺すくらいしないと気が済まないな」

「……だから、志保を傷つけた俺を殺すってことか？」

志保は首を縦に振った。

なんだと？

「そんな理由でオレを殺すっての」

言葉は途切れる。志郎に顔面を殴られたからだ。

「そんな理由、だと？ そんな理由って言ったかお前」

「ま……待て！ 悪い！ 悪かった！」

口が切れている。歯も何本か折れた。

「今までのことはすべて謝る！ だから、許してくれ！ 頼む！

殺すのだけは」

「自分の命がかかっていると、随分と必死なんだな。相手がそんなことを言ってきたとき、お前は今までどうしてきた？」

「それは」

視界が一気に飛んだ。また殴られたのだ。

「自分だけ助かるう、なんて思うなよ。なあ。神代」

声が出ない。全身が痛い。もう許して。

「俺は、あいつ 志保を、ずっと護る。だから、志保を傷つける

ようなヤツらは、排除する」

排除。まるで自分はゴミのようだな、と神代は思う。

「わかった！ もうアイツには近づかない！ だから」

許して、と言う前に志郎が口を開く。

「遅いんだよ、馬鹿。志保を傷つけた時点で、お前は 終わりだ」

終わり。終わり。終わり。終わり。終わり。

嫌だ。

「待て！ そうだ！ アンタがオレを殺したら大問題になるだろ！

？ 下手したらそれこそ一生ム所暮らし、いや、死刑だ！ アン

タがそうになったら、志保を護るヤツがいなくなるじゃねえか！ そ

れはマズイだろ！ だから、だから」

「そんなもん、モミ消すさ。お前が勝手に自殺したことにもすれ  
ばいい。俺には慕ってくれるヤツらも何人かはいるしな。協力して  
くれるハズだ」

何故、志郎が銃口をこめかみに当てているのかがやっとわかった。  
自殺に見せかけるためだったのか。よく見ると、志郎はご丁寧にも  
手袋をしていた。

「警察なんてみんながみんな綺麗なわけじゃない」ってな」

志郎の口が歪んだ。

「死ね」

志郎の指に力がこもる。

神代は叫んだ。

「やめろ！！ 頼む！！ お願いだ！！ やめてくれっ！！」

死にたくない。死にたくない。死にたくない。死にたくない。死  
にたくない。死にたくない。死にたくない。死にたくない。死にた  
くない。死にたくない。死にたくない。死にたくない。死にたくない。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌  
だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌  
だ嫌だ嫌だ嫌だ っ！！

志郎が銃の引き金を引くのが見えた。

人間交錯

そして、神代の意識はなくなった。  
。

## 第18話 前触

久瀬信一は車の中から通り過ぎる景色を眺めていた。

ひっかかることがあった。それは、予感のようなもので、根拠なんて、まったくない。だが。

信一の腕にはギブスが巻かれていた。

あのと、茂みから飛び出てきたふたりの男はどうやらあの救世主の男の部下かなにかだったらしい。あの男は恐らく刑事なのだろう。

その男の命令によって、信一は飛び出てきた部下ふたりに、美春似の女性と車に乗せられ、病院へと連れて行かれた。

予想通り、腕がポツキリと折れていたらしく、医者からは当分の間は安静にしているように言われた。

あの女性は眠ってしまったらしく、病院のベッドですやすやと寝息を立てて横になっていた。夕日に彩られ、綺麗な寝顔だった。

(美春)

それが、一種のきっかけだったのかもしれない。

信一は突然、あの刑事が別れ際に言った言葉を思い出した。

『だからお前らはそのふたりを早く病院に連れて行ってくれ。俺はまだやり残したこともあるしな』

やり残したことがある。

あの男はそう言った。

やり残した事。それは、なにか。

あの場に残ったのは、あの刑事と、撃たれて気を失った男。

刑事の男は、今ここで寝ているこの女性を必死に護ろうとしていた。そんなものは一目瞭然だった。そして、実際に助けた。

となれば、やり残した事はあの撃たれた男に関係すること  
のはず。

護ろうとしていた男。

傷つけられた女。

傷つけた男。

やり残した事。

(まさか)

信一はあることに気づいた。

ピストルはあの刑事の男が持ったままだ。

信一は座っていたイスから立ち上がった。腕の痛みなんて、気にならなかつた。

そして、さっきのふたりの男たちに、もう一度死の森へ連れて行くように頼んだ。

それは、予感だった。悪いほうの。

ふたりの男は案外とあっさり信一の頼みを聞き入れてくれた。

今、信一は車の窓から外を眺めている。雨が降ってきていた。

「……んん？」

助手席に乗っていた佐藤とかいう刑事が変な声を出した。

「おい、木村。ちょっと停めてくれ」

木村と呼ばれた運転席の男は疑問いつぱいの顔をしてブレーキを踏んだ。

なんだ？ どうしたんだ。まだ死の森には着いてないぞ。

「あそこ、人が倒れてる……」

佐藤が指差した先は、暗い路地だった。確かに、暗闇の向こうに足の先のようなものが見えた。

「しかも、ひとりやふたりじゃないな……」

そういうと佐藤は目を見開き、

「あれ……もしかして、血か!？」

「ななななな、なんですと!？」

木村が興奮し出した。危ない男らしい。

「……信一くん、だったな」

佐藤が振り返って言った。

「悪いが、ここからは歩いて行ってくれ。ここからならすぐに着く  
だろ」

そついうとふたりは車から降り、その問題の路地の方へとパシヤパシヤと音を立てて駆けていった。

……おいおい。

一瞬呆気にとられながらも、信一も駆け出した。

信一が死の森に着き、目にした光景は、まさに目を疑うものだった。

あの刑事が、銃を片手にもって立ち尽くしていた。その目線の先には、泡を噴いて気を失っているあの暴力男。

まさか。まさか。

(本当に、殺したのか?)

信一の足音に男は気づいたのか、振り返った。

「キミは……」

驚いた表情をしていた。なぜ、ここにいいのかという表情。

「……殺したんですか」  
信一はすぐに訊ねた。

その言葉を聞いた男は一瞬、キョトンとした表情を見せ、そして軽く自分を嘲るかのように口許を緩めた。

「……まさか。そんなこと出来なかったことは、キミがよく知っているだろう」

「……え？」

わけがわからなかった。

「この銃、元々弾は一発しか入っていなかった。あるとき俺が神代の足を撃つて、それで終わりだった。……銃の所有者なんだから、わかっていただろう？」

「そ、そうだったのか。」

暴力男には、確かに足以外撃たれたような跡はない。

「でも、殺すつもりだったんですか？ もし、それにもう一発入っていたら……」

男の顔から笑顔が消えた。しかし、すぐに微笑み、

「……さあ、ね」

ゆっくりとそう言った。

男は信一に背を向け、気を失っている男を見下ろした。

「ただ、実際に俺がしたことはこいつを脅しただけだ。簡単に気を失っちゃった。これから久保でも呼んで、署まで連行でもしてもらうか」

男は半ば独り言のように呟いた。

「しかし、なんでキミ、銃なんか持ってたんだ？」

「またもや男は振り返った。その疑いの目はまさに刑事そのものだ。またもや男は振り返った。その疑いの目はまさに刑事そのものだ。またもや男は振り返った。その疑いの目はまさに刑事そのものだ。」

「い、いや、僕もサッパリ……」  
「いまさら隠さなくてもいい。心配しないでいい。何にせよ、志保を助けられたのはこの銃のおかげでもある。感謝の代わり、言っただけなんだが、キミが持っていたことは秘密にしておくさ。なんとかしよう」

……実際、本当に知らないのだが。

信一が用意したのはレプリカであって、本物なんかじゃない。しかし、何故。

まさか、いつのまにか本物の銃と何かの拍子で入れ替わっていたとか？

……ありえない。そんなことあるわけがない。

悩んでいる信一を見て、男は苦笑いで「ま、そんなことはどうでもいいか」と言った。

どうでもいいことなのだろうか。

「とにかく、今日は助かった。ありがとう」

そう言うと、男はすぐに頭を下げた。

「い、いやそんな！ 実際助けられたのはこっちですし！」

信一は慌てて否定した。実際、自分なんて何もしていない。

「そんなことはない。キミが今日したことは、した行動は、十分に誇れる行動だ。それは、自分で認めてあげたほうがいいぞ」

男は頭を上げる。

信一は、なんだか恥ずかしくなった。

「……雨もひどくなる前に帰ったほうがいいな」

すぐにポケットから携帯を取り出し、どこかへかける。

「ああ、久保か。至急、死の森へ来い。……何？ 知るか、その。5分だ。わかったな。切るぞ」

男は本当に切った。電話の向こうから、男性らしき声の絶叫が、微かに聞こえた。

「俺は部下を待って、それからだが。キミはどうする。よければ、一緒に送っていくぞ」

「あ、いえ。大丈夫です。もう帰りますから」

信一は男の申し出を断った。

なんとなく、ひとりになりたかった。

「そう、か」

男はポツリと言った。

「え〜と、では。僕はこれで」

「ああ。また逢うときまで、お別れだ」

最期に、男はそう言った。

また逢うとき。

なんとなく、それは近い内に訪れる予感を信一は感じつつあった。

そして、信一は死の森をゆっくりと後にした。

信一は、意味もなく空を見上げた。

街を覆っていた黒雲の隙間からは、日光が顔を出していた。

晴れるのも時間の問題だな。

そのとき信一は、ただそれだけを思った。

## 最終話 明日

黒崎健二は真っ白な空間で目を覚ました。  
目に映るのは、真っ白な壁。真っ白なベッド。真っ白なシーツ。  
カーテン越しに入ってくる光。

(ここは……)

「あ、目が覚めましたか？」

聞き覚えのある声。大切な人の声。

瑞穂の笑顔が、見える。

「瑞穂……さん？」

はい、と彼女は笑って頷く。

どうやら、ここは病室のようだ。いったいなんで

(ああ。そうか。俺、刺されて )

刺された？ そうだ。刺されたんだ。

「あ、ま……間宮のヤロウは!？」

健二は上半身を勢い良く起こした。腹の辺りがチクツとした。

「大丈夫ですよ。あのあとすぐにお父様たちが捕らえましたから。

今は…… たぶん、拷問を受けているころだと思えますよ。犬同然の扱いで」

サラリと恐いことを言う。

「あつ、犬といえはさつき、外に犬がいたんですよ。可愛かったなあ。小さくて。でも、捨てられたみたいで、ボロボロでした。せつかくなので、首輪を買って、着けてあげたんですけど……。誰か心優しい人に拾われればいいんですけどね」

夢見心地でまくし立てた後、我に返ったのか、少し顔を俯けた。

「健二さんは……大丈夫ですか？」

瑞穂が心配気な表情で健二を見つめる。

「ああ。少し痛むくらいですよ。全然平気」

そう言うと瑞穂は「良かったあ」と、安堵の声を出した。ヤバイ。

可愛すぎる。

「警察の方が、健二さんが倒れているのを見つけて、病院へ運んでくれたんですよ」

「……瑞穂さんは、俺が起きるのを、ずっと待っていてくれたんですね」

「ええ。絶対戻ってきてくれるって、信じてましたから」

「すみません。少し遅くなりました」

「ホントですよ。3日も起きなくて。本当に……心配したんですからね」

そう言った瑞穂の目が、涙で少し滲んだ。

「……ただいま」

「……お帰りなさい」

瑞穂が健二の胸元へ頭を置く。健二はやさしく包むように抱きしめた。

「まったく、人の前で……。これだから最近の若いモンは……」  
「いつのまにか源五郎がいた。」

「どわあああああつー!!」

健二の叫びとともに、咄嗟に健二と瑞穂の体は離れる。

「お……お父様！ いつの間に！」

「ついさっきだ」

「お……お義父様!!」

「だから、その呼び方はやめろ」

瑞穂の顔がうつすらと赤くなっていた。

「それより、健二。退院だ退院。さっさと準備をしろ」

「……ハ？」

健二も瑞穂もポカンとしている。

「何事も早い方がいいだろう。お前はまだ全治していないかもしれんが、覚悟しておけよ。ウチの組でのお祝い事は、激しいぞ」

「え？ それって……」

「け、結婚、ですか？」



折原志保は葉桜銀行の控え室で、同僚たちと話をしていた。

「ええっ！　じゃあ、先輩！　体調を崩したってというのは嘘だったんですか!？」

「うん、まあ、そういうことになるかな、なんて」

志保の先輩、祥子が気まずそうに頭を掻きながら答える。

「私、先輩の代わりに仕事したんですよ!？」

「とはいえ、昼からは仕事どころじゃなくなっていたのだが。」

「うん。ホント、ごめんね。今度絶対なにか埋め合わせするから。許して。ね」

手と手を合わせてお願いされる。

「しょうがないですね……。もう、代わったりしませんからね」

志保がそう言うのと、祥子の顔がパツと明るくなり、

「さすが志保ちゃん！　ありがと！　大好き！」

「何言ってるんですか」

「でもね。聞いてよ志保ちゃん。あの日、私、彼とデートしてたんだけどね」

「そ、そんな理由で?……。」

「彼、いきなり遅刻してきたのよ。『先輩に車を奪われた!』とかわけのわからないこと言って。素直に謝ればいいのに、言い訳なんかしちやって」

「はあ……」

「どうしよう。もの凄くどうでもいい。」

「しかも、夕方頃……かしら。彼の携帯が鳴ったと思うと、彼、すぐ『5分で行かなきゃ殺される!』とかなんとか言っただけで行っちゃったのよ!?　信じられる!?　せっかくホテルも予約してあったのに!!　ねえ、志保ちゃん!　どう思う!?!」

「はあ……それは、ひどいですね」  
「いろんな意味で。」

その後もベラベラと喋る祥子をほっとき、志保は友だちの奈緒子のところへ行った。

しかし、その奈緒子もいつもとどこか様子がおかしい。綺麗な花が入った花瓶を見つめ、ため息をついている。

「……どうしたの？」

「ああ、志保。おはよ」

「そして、またため息。」

「な、何かあったの？」

「……王子様よ」

「……え？」

「王子様が、私の前に現れたのよ」

「まだ寝ぼけているのだろうか。」

「ホラ、前ここで銀行強盗があったじゃない」

「え？ う、うん」

その日のことはよく覚えている。

「あの時ね、犯人に襲われそうだった私を、助けてくれた人がいたのよ」

「夢見る少女のように語る。」

「そ、そうなんだ。危なかったんだね」

「その人、『ちよつと預かってもらっていいですか？』って微笑んでこの花をくれたの。ああ……カッコ良かったなあ……」

「奈緒子の周りだけ気温が上がっていた。」

「へえ、で、どうなったの？」

「その言葉を聞いた奈緒子のテンションが一気に落ちた。」

「それが、いつのまにかいなくなっちゃって……。なんで名前だけでも訊かなかったんだろ。私の馬鹿っ……」

「頭を抱え込んだ。」

「で、でも、上手くいくよきつと！ うん！」

「志保……。あなた、本当に優しいのね」

「顔を上げた奈緒子は手を握り、」

「私たち、一生友だちよ！！」

「そう言った。」

「わ……わあゝい」  
もう、なにがなにやら。

昼休みになり、志保は外に出た。  
外はすっかり寒くなってきている。冬も近い。  
息を吐く。白い気体が出ては消えた。

(志郎くん……、マフラー使ってるかな)

あの日、病院のベッドで目覚めた志保は、まくらの脇に紙切れと箱が置かれているのを見つけた。

紙切れには、『すみませんでした』という文字だけが書かれていて、箱は、志保が志郎にあげるためのマフラーが入った箱だった。

結局、あの青年はなんだったのだろうか。

ただひとつわかることは、志保を助けようとしていたこと。あのときはパニック状態に陥り、冷静な判断が出来なかったが、今思えば、あの青年が自分を助けようとしていたことがわかる。

何にせよ、もし、今度逢ったらお礼をしなくちゃいけないな、と志保は思っていた。

## 人間交錯

風が冷たい。

息が白くなって口から出てくる。

ふと、足元を見る。紙切れが落ちていた。何の気なしに、その紙切れを志保は拾う。それは、宝くじだった。なんだかやけに汚れている。

書かれている番号は、54-1234。

そのとき、足元からクウ〜ンと鳴き声が聞こえた。

目線を下げる。犬がいた。小さくて可愛い。

くう〜ん……。

抱きしめたいくらい可愛かった。

しかし、この犬もやけに汚れている。捨てられたのだろうか。それにしては首輪がやけに新しい。

その犬が、志保の足に頭を寄せてくる。志保は屈み、犬と同じ目線になった。

「どうしたの？」

くう〜ん……。

犬は、志保が手に持っている宝くじを見つめていた。

「あ、これが欲しいの？」

犬はさつきよりも強く鳴く。

「そっか。ハイ、じゃあ、ここに挟んどいてあげるね」

志保は犬の首輪の間に、その紙切れを挟んだ。

勝手に人の宝くじを挟むのはどうかと思ったが、ここまで汚れているのだから、落として一週間以上は経っているだろう。持ち主も諦めているはずだ。

そう自分を納得させた。

犬はすぐにどこかへ走って行ってしまった。

志保も立ち上がる。

時計を見る12時42分。志郎とのデートの約束までは、まだまだ時間があつた。

(今日は、どこに一緒に行こうかな)

足取りは軽い。

志保は歩き出した。



？」

「別に」

「いいっスね。3億円当たった人。きつとこの瞬間、世界中の誰よりも幸福感に包まれているんじゃないスかね」

「どうだかな。案外、その当たりクジを落として泣いたりしてるかもしれないぞ」

「まっさか」

志郎は何の変哲もない醤油ラーメンをすすった。

「そういえば……、アイツはどうなった」

「アイツ？ ああ、神代のことっスか。ありやもう駄目スね。壊れてます。牢屋ん中で『死にたくない！ 死にたくない！』ってずっと叫んでますよ。廃人っスね、廃人。もう社会……いや、現実復帰も無理って医者も言っていましたよ。幻覚でも見てるんスかね」

「さあな」

あの日、志郎は本気で神代を殺すつもりだった。

だが、弾がなく、殺せなかったのだが、結局は殺したことになるのかもしれない。あの時の志郎の行動が、神代に『永遠の恐怖』を与えることになったのだから。

ハンカチで口を拭い、コップの水を飲み干した。

「さ、行くぞ」

郎は立ち上がった。

「ハイ。……ところで、志郎さん」

「なんだ？」

「そのマフラー、最近いつも巻いてますけど、なんか大切なものなんスか？」

久保は志郎のマフラーを指差して訊ねた。

志郎は答える。

「ああ。とつても、な」

志郎は勘定を済ませ、外へ出た。

「うわっ。寒いっスね」



信一は袋からワインを取り出して、墓石の前に置いた。

「お前、これ好きだったよな。高かったぞ。まったく、とんだ出費だ」

信一の顔から笑顔が消える。

「こんなこと言うと、お前に叱られるかもしれないけど、俺、実は死のうと思つてたんだ。お前のいない世界なんて意味がない、早く死んで、お前のところに行きたい。そう思つてさ」

信一は一度、大きく息をつく。

「けど、俺、生きようと思う」

きつかけは、やはりあの日だった。

「笑うなよ？ 俺、警察官になろうと思うんだ。その勉強も今してる。勉強なんて徐々に疲れるけどな。それでも、前までの腐りきつた生活よりは断然いい。なんていうか、うん、『生きてる』って感じでさ。もしかしたら、俺はもう、とっくに死んでいたのかもしれないな」

信一は笑った。

「でも、生き返ることが出来た。俺は、もう美春みたいに、理不尽に死ぬ人を見たくない。ひとりでも多くの人を救つてあげたいんだ。だったら、警察官になるのが一番かと思つてさ。桜井さんっていう刑事も協力してくれるって言うし。……ダメな俺が言うような台詞じゃないな」

苦笑い。

「なあ、美春。これから、俺のこと見ててくれないか。前までは、自慢できるような兄じゃなかっただろうけど、でも、俺は絶対に、お前に『自慢の兄です』って言わせられるような兄貴になってみせるから」

風が吹いた。

木々が揺れ、葉が音を立てる。

そのとき、どこからか来た犬がトボトボと信一の前へ歩いてきて、立ち止まった。

薄汚れた犬

まるで、以前の自分だ  
ほっとけなかった。

「どした。俺ん家、来るか？」

犬は頷いた……ように見えた。

「よし、そうか。じゃあ、俺と一緒に帰ろう」

信一は歩き出す。犬も素直についてくる。

信一は立ち止まり、振り返った。

「また、来るから……」

そう言った途端、また風が吹いた。

「！！」

信一は墓石の方を見た。

今、確かに聞こえた。

美春の声。

「兄さん、頑張つて」と。

信一は呆然とその場で立ち尽くしていた。

犬がそんな信一を見上げている。

「……ああ。もう、大丈夫。絶対、諦めたりなんかしない」

信一はそう言つて、踵を返した。

犬があわてて信一の後に行く。

（見ててくれ、美春）

風が背中を押す。

信一は、予感があった。

きっと、幸せになれるという予感が。

人間交錯

人間交錯

完

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5104a/>

---

人間交錯

2008年11月7日08時13分発行